

---

# Piece of Legend ~ 伝説のカケラ ~

今尾実花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Piece of Legend（伝説のカケラ）

### 【Nコード】

N8977F

### 【作者名】

今尾実花

### 【あらすじ】

Legendシリーズの番外編です。こちらだけでも読めますが、本編を先に読まれると一層楽しんで頂けると思います。殺人や流血など、残酷な描写が含まれている話もありますのでご注意ください。

## 用語解説：1

### ・登場人物

アルフォンス・ロツテカルド：金髪碧眼の。身長が気になる十六歳。界王の剣を抜いて旅に出た。母が人王、自分は唯一の血族であることが判明。旅先での食い倒れが楽しみ。通称アル。

セルグ・レナード：黒髪黒眼の。青春真っ盛りな十八歳。その強い感受性からアルフォンスに何かを感じ、旅を共にする。商売の知恵を、隊商の頭である父に叩き込まれた。師匠に叩き込まれた賭博が好きだし、強い。

リネア・ル・ノース：黒髪黒眼の。冷静沈着な十八歳。その正体は禁忌の子。強大な魔力と法力を宿す。過去の贖罪のために旅を続ける。知識欲が旺盛で、読書が趣味。面倒くさがりなので、基本的に自分から動くことはない。

ローザン・ウェシヤス：桃髪桃眼の。姉御肌な十九歳。移動生活を営むルマ出身で、次代の族長。一族を守る力を得るため、アルフォンスと旅を共にする。酒豪で酒好き。一行のまとめ役。

リユーン・スイーバル：緑髪緑眼の。一行のお兄さんな二十五歳。姉弟ともに霊力が高い。口調も性格も、のんびり。記憶力に優れているが体力はナシ。束縛から解放され、憧れていた旅へ。旅先での発見と探求が楽しみ。

ニーナ・キャズタ：金茶髪緑眼の。頑張り屋な十五歳。力不足で役立てないことに悩んでいる。真面目だが、良くも悪くも空気読

めないトコ有り。世界を知り、成長するために旅へ。甘いものや花が好き。

ラルフ・クロス：白髪紅眼の。暗い過去を持つ推定十八歳。罪を犯し、アーサーに保護される。先天的に気力が弱く、高い妖力で補っている。妖力が高い者の立場を改善するため、旅へ。星の観察が趣味。

クレア・リ・ネール：銀髪碧眼の。おっとり系な二十二歳。天の孫娘で、リネアの従姉妹。父がブルーエルフ族のため、強い霊力も宿す。各地の音楽を聞くことが楽しみ。

・その他の登場人物：第一部

ルディック：アルフォンスと同じ孤児院に暮らす少年。アルフォンスを兄のように慕う。

ゴルディアス・シャーナ：先代の東派武闘神。セルグの師匠。通称ゴルド。

シャルラン・ガイラ：白髪青金眼の賢者。全て規格外な推定三十六歳。リネアの師匠であり、育ての親。リネアを異常なまでに溺愛している。魔王とは親友。アスケイル王は腐れ縁。全界王と面識有り。

ティティス・スイーバル：盲目の精霊使い。リユーンの姉。人のオーラを色として感知出来る。

グレゴリー：チルト派の僧侶。準修士で、さらに昇格するためリ

ネアを利用しようとして失敗。シャルーランに排除される。

アーサー：チルト派の僧侶。修士。ラルフたちの育ての親で、孤児を巡礼先で保護してきた。スードの領主。幻影族に操られて命を落としかけるも、無事に生還。

エルネスト：賢者に匹敵する能力を持つ存在、隠者。ダブルル派の一僧侶に身をやつす。アルフォンスの父親を知る人物。

テオドール・ロットカルド：アルフォンスの亡き父。この世が大きく歪んだとき、界王の間に異物と判断されたため強制的に排除され、死に至った。

#### ・その他の登場人物：第二部

フレデリック・ロム・アスケイル：アスケイルの現国王。シャルーランとは魔法使いの修行生の同期。一意相当の実力があるが、二位にとどめている。性癖はかなり自由人。面食いだが、シャルーランはあまりに性格が悪くて範囲外。リネアを娘のように想っている。

若宮：ジーパの皇太子、日嗣の御子。本名は本人と両親のみ知るとても思いやりの深い人物。

ブラッド・レナード：セルグの父親。ジーパ有数の貴族の分家当主。隊商の頭領でもある。扉守りであることに誇りを持つも、息子には自分の道を切り開いてほしいと思っている。

パティ・レナード：セルグの母親。当主である夫を細やかに、時には厳しく見守る。

カイル・レナード：セルグの弟。修行中に生まれたため、セルグは存在すら知らなかった。兄に憧れていて、少し甘えん坊。

ロイ：隊商の用心棒。有能で、みんなから好かれる。隊が動かないときはレナード家の護衛をしている。

・その他の登場人物：別編

ルウ：クワントの町に住んでいた、リネアの親友。幻影族がリネアを狙った策略に巻き込まれ、リネアの目覚めの余波によって命を落とす。金茶の髪、緑の瞳。

マオ：ルマの中でも特に優秀な占者で、ローザンの親友。父母を失くし、祖母のもとで暮らしている。

リー・キャズタ：ニーナの祖父。チルト派の僧侶。準修士。

・分類

界王：世界の頂点。強大な特殊力と界王力によって世界の均衡を保つ役目を担い、基本的に政治介入はしない。

界王の血族：界王の子孫。界王には劣るが、いずれも強い力をもつ。界王の証のうち、一つないし二つを持ち、親となった民と同じ特殊力の特徴をもつ。

界王の証：髪と瞳の色、及び身体の各部に浮かび上がる紋様のこと。界王は即位時に、三つ全ての証を揃える。

民：界王とその血族以外のヒトを示す。混血しても、民の特徴が混在することはない。

特徴：民ごとに必ずもつ髪や瞳、肌の色、宿す特殊力のこと。人族は『四つ全ての特殊力をもつ』が特徴となる。

特性：民ごとの得意分野のこと。但し、あくまで傾向。人族では一族や民族など、細分化した状態で存在する。

ヒト：界王、界王の血族、民を総合して指す言葉。あまり界王には用いない。

扉の守り人：通称、扉守り。民でありながら、世界を繋ぐ扉を守護する。扉ごとに存在し、十六の血統がある。彼らの許可なしには、扉を通ることはできない。界王と血族のみ、自由に往来できる。

#### ・世界と界王

この世：五世界をまとめて指す言葉。また、現世。

世界：『この世界』と言った場合、現在いる世界を指す。

人界：全世界の中心と言われ、世界規模の比較をする際、基準となる場。人族が住む。

天界：全体的に冷涼な気候。天族、エルフ族（ブルーエルフ族、レッドエルフ族）、幻影族が住む。

獣界：陸地は広く、植生が豊か。獣族（牙獣族、草獣族、鳥獣族、

水獣族)、甲殻族が住む。

魔界：陸地が狭く、山は険しい。魔族、夢魔族、妖族が住む。

精霊界：全体的に温暖な気候。精霊族、ホビット族、ドワーフ族、オーク族が住む。

人王：界王で唯一、四つの特殊力を宿す。その強さはすべて等しい。髪色は金、瞳は空色。紋様は鎖骨の中央。

天王：法力を宿す。髪色は白銀、瞳は橙色。紋様は右頬。

獣王：気力の扱いに長ける。髪色は鳶、瞳は琥珀色。紋様は左手の甲。

魔王：魔力を宿す。髪色は菫、瞳は黄金色。紋様は左頬。

精霊王：霊力を宿す。髪色は露草、瞳は珊瑚色。紋様は右手の甲。

## ・民

人族：人界に住む唯一の民。特徴は四つの特殊力を宿すこと。国という枠組みをもつ。

天族：天界の主要民。特徴は強大な法力と、青緑の瞳と白の肌。法術に秀でる。

ブルーエルフ族：天界に住む。特徴は霊力と法力、青銀に輝くの髪と白の肌。音楽に秀でる。

レッドエルフ族：天界に住む。特徴は微弱な霊力と法力、赤銅に輝く髪と褐色の肌。剣術に秀でる。

幻影族：天界に住む。特徴は強大な妖力と、臍のように確たる姿を持たないこと。他のヒトとは交われない。思考力を奪う術に秀でる。

牙獣族：獣界に住む。特徴は微弱な霊力と法力、獣の尾、鋭い牙と爪。気術の扱いに長ける。

草獣族：獣界に住む。特徴は霊力と魔力、獣の尾と耳。知略に長ける。

鳥獣族：獣界に住む。特徴は霊力と魔力、鳥の翼と足。風喚びに長ける。

水獣族：獣界に住む。特徴は高い霊力と法力と妖力、魚の尾びれ。主に水中で暮らす。水中の戦いに長ける。

甲殻族：獣界に住む。特徴は微弱な妖力と、甲殻類の殻。防御力に秀でる。

魔族：魔界の主要民。特徴は強大な魔力と、漆黒の髪と深紅の瞳。魔術に秀でる。

夢魔族：魔界に住む。特徴は魔力と妖力と霊力、撫子色の髪。夢を操る術に秀でる。

妖族：魔界に住む。特徴は妖力と、緑白の髪と墨色の瞳。精神を

操る術に秀でる。

精霊族：精霊界の主要民。特徴は強大な霊力と、透き通り光輝く肢体をもつこと。固有の系統を持ち、他のヒトとは交われない。転移術が得意。

系統：光、闇、水、炎、風、地、緑、鋼の八つ。それぞれ特性や体躯の色が異なる。

ホビット族：精霊界に住む。特徴は霊力と法力、胡桃色の瞳、小柄な体躯。動植物の育成が得意。

ドワーフ族：精霊界に住む。特徴は微弱な霊力と妖力と魔力、焦げ茶色の髪、頑健な体躯。武具の錬成が得意。

オーク族：精霊界に住む。特徴は妖力と紺色の瞳、腐敗したかのような肢体。革の加工が得意。

#### ・特殊な力

界王力：界王と界王の血族だけが宿す力。その身に危険が迫った時、必ず発動する。自らが属する界王の間が続く扉と、世界を繋ぐ扉を開閉できる。

特殊力：法魔霊妖の四つ。石や玉にも宿る。全生命は種類ごとに宿す力が決まっている。尽きれば息絶える。

法力：天王が最も強く持つ。動と静を象徴。

魔力：魔王が最も強く持つ。生と死を象徴。

霊力：精霊王が最も強く持つ。有と無を象徴。

妖力：人王が持つ力の一つ。柔と硬を象徴。

気力：獣王が扱う力。特殊力と違い、森羅万象に宿る。生命力、体力に直結。潰えることはない。

特殊石：特殊力が宿った石、または玉のこと。錬成することで金属と融合可能。働きは大きく分けて二つで、使用者の特殊力を増幅か減退させる。ほとんどは前者。

扉守りの力：世界を繋ぐ扉を開閉することが出来る。界王の間で続く扉は開閉できない。血統によって受け継がれ、制約も多い。

．．．e t c．

## 用語解説：2

### 職

五大職：魔法使い、僧侶、剣士、武闘家、吟遊詩人のこと。最も職業人口が高く、最も修めるのが困難。

賢者：五大職を修めた者に与えられる称号。全てから独立した権力を持つ。史料に残るのは十人のみ。シャルランは最年少。

隠者：賢者になれる実力を持ちながら、その称号を得なかった者。理由は権謀術数を拒んだため、など様々。

組合：流派や宗派とも言う。職種自体を指すことも。職は複数の組合から構成される。

階級：職で位に沿って与えられる称号のこと。組合ごとに異なる場合がある。

位：職ごとに、それぞれ数が違う。上から一位、二位……、と言う。

最高位：一位や修士とも言う、職の頂点。

高位：概ね上のほうの位にいる者の呼称。およそ三位以上の位を差す。

上位：対象者より位が高い者を指す。

修士：一位の者のこと。最高位とも言う。

準修士：二位の者のこと。どの職でも、ここで一応の修了となる。

見習い：最下位の者のこと。様々な制約がある。

一人前：見習いより一つ上位の者のこと。何かしらの証が授与される場合が多い。

修了：修士、または準修士の位に達したこと。修めた、とも言う。

#### 職名や流派、宗派

魔法使い：五大職の一つ。魔力を行使する職で、五段階。登場時点で（以下同じ）リネアは準修士（後に修士）、シャルランは修士。アスケイルの組合長は、本来はシャルラン。現在はアスケイル王配下の人物が代行。修士は魔導師と称する。

僧侶：五大職の一つ。法力を行使し、九段階。ニーナが九位（後に八位）。宗派ごとに階級が異なる。チルト派の修士は大僧正と称する。組合ではなく宗派。

チルト派：僧侶の宗派で、三大宗派の一つ。北ドーニヤやアイルが中心。慈愛の精神を第一とし、唯一神チーリスに仕える。ニーナが属する。

三大宗派：チルト、アーム、ダブリルのこと。

剣士：五大職の一つ。気術と特殊力の全てを駆使し、八段階。ア

ルフォンスは就職していないので、正式な剣士ではない。修士は黄金<sup>ガネ</sup>と称する。

武闘家：五大職の一つ。気術を用い、七段階。セルグが七位（後に四位）。修士は武闘神と称する。組合ではなく流派。

東派：武闘家の流派の一つ。アスケイルが中心。自制と忍耐を重視する。セルグが属する。

西派：武闘家の流派の一つ。北ドーニヤが中心。勝利と発展を重視する。

吟遊詩人：五大職の一つ。霊力を用い、六段階。クレアが準修士。修士は楽士と称する。組合ではなく流派。

踊り子：気術、特殊力はいないで、十段階。ローザンが五位（後に二位）。修士は薔薇と称する。

風使い：霊力を主に用い、六段階。ローザンが三位。修士は風神と称する。

精霊使い：霊力を用い、十段階。クルツアータに本部がある。リユーンが三位。修士は心と称する。

占い師：霊力を用い、八段階。クレアが四位。修士は先見と称する。

土地と大陸

中ノ島：人界で方角をみるとき、基準点となる島。人界の世界地図では必ず中心にある。

中ノ海：中ノ島の周辺の海。五大陸に囲まれている。

五大陸：アスケイル、シエーマス、北ドーニヤ、南ドーニヤ、アイルのこと。

四大国：アスケイル王国、シエルマス共和国、ドーニヤ帝国、ラズ連邦のこと。

周国：大陸にある、四大国以外の国のこと。アイルでは用いない。

アスケイル大陸：アスケイル王国がある大陸。中ノ島の北東にある。

シエーマス大陸：シエルマス共和国がある大陸。中ノ島の南東にある。

北ドーニヤ大陸：ドーニヤ帝国がある大陸。中ノ島の北西にある。

南ドーニヤ大陸：ラズ連邦がある。中ノ島の南西にある。

アイル大陸：通称、新大陸。中ノ島の南にある。大国はない。

国と町、村

アスケイル王国：四大国の一つ。大陸の東部にある。四大国で最も歴史が古い。アルフォンスとリネアの故国。

アスクガーデン：王国の首都。通称、王都。

ルゴルス：アルフォンスが育った北部の山村。

ジーパ：アスケイル大陸の、さらに東にある島国。獣界に繋がる界王の扉がある。セルグの故国。人界で最も歴史が古い国家。

シエルマス共和国：四大国の一つ。四大国で最も面積が広い。大陸の中央部にある。ローザンとリユーンの故国。

クルツアータ：精霊王の加護を受ける町。精霊使いの本部があり、リユーンの故郷。

ドーニヤ帝国：四大国の一つ。大陸の南部にある。四大国の中で最も歴史が浅い。

メリコ：ドーニヤ帝国の西にある周国の一つ。薬草市が有名。二ーナの故国。

ファームル公国：メリコの隣国。周国の一つ。チルト派の支部がある。

ラズ連邦：四大国の一つ。四大国で最も人口が多い。大陸の西部にある。

アイル：新大陸では最も大きい国。それでも四大国の半分ほどの面積。ラルフの一応の故国。

スード：ラルフの育ての親、アーサーが領主の町。ラルフが育つ

$t_c$

.  
. .  
e  
t  
c  
.

## 紅の月へ巻：リネア

「生まれれた『歪』」

この世のどこか、生ける者達が容易く立ち入れぬその場所に、一組の男女がいた。

いや、もう一人。幼子が女の腕に抱かれている。何とも気持ちよさそうに眠り、幼子だけが得られる幸福を夢の中で貪っていた。

己の運命など、知る由も無く。

「この子のこと、くれぐれもよろしくお願いします。幸い、あなたによく懐いたようですし……」

「お任せ下さい。私が立派に育てて見せましょう。どうかご心配なさらずに。……あいつの子供ですから、手を患わなくて済みそうですし、ね」

「ええ、本当に。……ですが、万一のことでも忘れずに」

「心得ております。私の全てに懸け、この子を守りましょう。……この世のためにも」

この世は五つに分かれ、それぞれを『界王』が統べる。

界王とその血族は魔力などの特殊力を民とは桁違いに備えており、更に『界王力』と言う特別な力も持つ。その為彼らは普段『界王の間』という特別な空間に住み、滅多に姿を見せない。

また、この世には様々な『職』が存在する。

これはどの世界の民も自由に選択できるが、修めるのはどれも非常に困難で、一生かけても不可能なことも多々ある。

しかし天武の才を持つ者はいて、それらは複数の職を修めること

もある。特に五大職と言われるもの全てを修めた者には『賢者』の称号が送られる。この称号を得た者は世に記録が残る過去数千年の間で、わずか十人しかいない。彼らは界王と同様の敬意と畏怖をもつて、民から崇められる。

そんな世界で、一人の少女が育っていた。

二、出会った『人々』

ここは人界にある、通称『賢者の塔』。四大国の一つ、アスケイルの山中深くにそびえ、世俗と隔絶された場所だ。

「リネア、入るよ」

扉を叩いて、一人の男が扉を開けた。すらりとした長身で、まだ若い。

その面立ちは美しく、誰もが振り向く造りをしていた。瞳は金と水色がまじった不思議な色で、髪はもつと不思議な白銀。むしろ純白と言ってもよく、腰まで伸びたその髪は美しい。

この男こそ史上最年少で賢者の称号を得た、最強と名高いシャルーラン・ガイラだ。

そのシャルーランが入った部屋には一人の少女がいた。

「はい、何でしょうか？」

この少女は賢者の唯一の弟子であり、名はリネア・ル・ノース、

八歳。

成長すればシャルーラン以上という美しさを秘めているが、髪は真逆の漆黒で、瞳も闇のように黒い。肌が雪のように白いので、対を成してどちらも引き立つ。

その自然の美の中に目を引くのは、頬にある真紅の　　まるで血染めのような紋様だ。

「組合の用事でクワントの町に行く必要が出来てしまったんだ。急だが、リネアも用意をしてくれるかい？」

「わかりました」

「では用意ができれば私の部屋に来てくれ。なるべく早く頼むよ」「はい」

リネアのハキハキとした返事に満足して、シャルーランは優しく微笑んで自室に戻った。しばらくすると、リネアが用意を終えて部屋にやって来た。

「よし、行こうか」

シャルーランはそう言ってリネアの額に手を当てると、高位の移動術を一息に発動させた。すると次の瞬間、二人はもう目指す町の入口に降り立っていた。

「さ、行こう。遅れてしまう」

一瞬で国すら横断した二人は疲れた様子など欠片も見せず、目的の建物に行くため、町の広場を通り抜けようとした。そこで、ふとリネアの歩みが止まった。

「どうした？」

「い、いえ、何でもないです」

何もなければ、この子が歩みを止めるわけが無い。

シャルーランがそう思っただけを見回すと、広場で遊ぶ子供達の姿が目についた。(ああ、あの子らと遊びたいのか。この子も……まだ子供だからな)

「行っておいで。私は夕方には終わるから、そのとき迎えに来る」

「えっ……？」

「たまには遊んできなさい。この町なら問題は起きないだろう。ただし、いつも言っていることは守るように。いいね？」

「はい！」

シャルーランの言葉に、リネアは笑顔で答えると元気よく駆けていった。その後ろ姿を見送り、シャルーランは自分の用事を済ませるためにその場を去っていった。

「あら？ はじめまして、よね。私ルウって言うの。あなたは？」

リネアが子供たちに近づくと、その姿を見つけた一人の少女が早速、声をかけてきた。

「う、うん。私はリネア。よろしく」

「よろしくね！」

このルウという少女を仲介に、リネアはすんなりと町の子供達の輪に入れてもらえた。しかし、ルウがリネアをみんなに紹介するや否や、リネアは矢継ぎ早に質問攻めにあうこととなった。

それはリネアを不審がったの行為ではなく、どうやら好奇心旺盛、というところらしい。

「この町の子じゃないよね。隣町に住んでるの？ それとももっと遠く？」

「ア、アスケイルに住んでる。今日は師匠の用事で来たの」

「アスケイルのどこ？」

「師匠？ 何をやってるの？」

「あ、えと、小さな町だから……。その、たぶんみんな知らないよ。それで、やっているのは、魔法を」

あちらから、こちらから、どんどん質問が飛んでくる。同年代の子供と普段から交流がないリネアは、この勢いに戸惑いを隠せない。

「すごい！ 魔法が使えるんだあ！ ね、やってみせて？」

この羨望も世間の『普通』なら当然。だがリネアの『普段』では考えられないものだ。

何故なら自分の生活は魔法と共にあり、魔法があるからこそ今の自分、今の生活があるのだ。魔法が無ければ、賢者である師匠と共にいることなどなかっただろう。

例え両親の愛を知らずに過ごそうとも、師匠がいてくれるなら、それでいい。

「ごめん、師匠に禁止されてるんだ。まだ力の制御ができないから、勝手に行使するのは駄目だって。みんなに怪我させちゃうかも知れないから」

「そっかー、残念」

(本当は、違うんだけど……)

師匠との約束は四つある。住む場所、身分を明かさないうこと。術

を使用しないこと。最後に、その理由として力の制御が不完全のため、と言うこと。

（もう一人前の位は持つてるのに、何でだろう。師匠が言うから無意味なわけではないけど、理由が知りたいな……）

五大職の一つである魔法使いは、当然修めるのは至難の技であり、一人前の位に達するまでもかなりの年月を要する。

それをリネアは八才という若さ、いや幼さで得ている。

普通ならこの快進撃に、恐怖を覚えるほどでもあるのだが、少女はその純粹さゆえに真実を知らずにいた。

「ねえ、いいからもう遊ぼうよ。トントって知ってる？」

「う、ううん、知らない。どうやってやるの？」

「これはね、このボールを……」

楽しい時間は、早々と過ぎていく。

日が暮れ始めると一人、また一人と子供達は家路についていった。やがて広場残ったのはリネア以外に、最初にリネアへ声をかけてきたルウの二人だけになった。

ルウは栗色の柔らかい髪がふわふわと風になびき、緑の子供らしい大きな瞳は好奇心に満ち溢れている。

「ねえ、リネア。リネアの師匠ってどんな人？」

「師匠？ 師匠は……、そうだなあ……」

賢者と言えたら説明は楽なのだが。何かいい言葉は無いだろうか。

「とにかく術が上手いかな。それに頭もいいし、運動神経もバツグンだよ」

ありふれた言葉だが、これ以外に説明の仕様がなかった。特殊力を自在に駆使し、博識で武術にも長ける。

どうしたって、この陳腐な言葉しか思い浮かばない。

「他には？ 厳しい人なの？」

「えっと、修行中はやっぱりそうかな。妥協は許さない人だから。

けど、いつもは……とつても優しい」

「そっかあ！ いいなあ。そんな完璧な人ってホントにいるんだね。リネアだけでも十分凄いのに、師匠は師匠なだけあって、さらに凄いんだ」

リネアは少女の素直な賞賛に、喜ぶよりも先に面食らってしまった。

こんな純粋な賞賛はリネアにとって、初めてのことだった。

「え？ 凄いつて？」

「だってリネアも綺麗だし、魔法が使えるし、頭もよくて優しいよ。さつきコウが怪我したとき、すぐに手当してくれたよね。薬草を持ってるなんて、ホント驚いちゃった」

「そ、そうかな」

ここまでハッキリと言われたら、流石のリネアも照れる。思わず赤面してしまった。

照れたリネアは、慌てて話題を逸らす。

「そ、そうだ。ルウは帰らなくていいの？ 皆はもう帰ったのに。怒られない？」

「大丈夫、いつもお母さんが仕事帰りに迎えに来てくれるの。リネアはここで師匠を待ってるんでしょう？ いつ来てくれるの？」

「そろそろだと思っけど……」

「あ、じゃあ私、どの人だか当ててみる！ ようし……」

ルウは勇んで雑踏に目を凝らす。

そんな彼女の突飛な思いつきに驚いたものの、リネアは自分の師匠の容姿を告げていないことを思い出した。

「ルウ、師匠はね……」

「あ、あの人でしょ!？」

言葉を遮られたリネアがルウの示した先を見ると、確かにそこにシャルーランがいた。こちらに向かって歩いてくる。

「すっ、すごい！ どうしてわかったの？ 見た目は言っていないに」

「ん、何となくだよ。けど、そっくりだと思うよ？」

「え？ どこが？」

リネアと師匠は親子ではないから、どこも似ていない。髪だって白と黒で印象がまるで違う。

そのことを言おうとしたリネアは、続いたルウの言葉に絶句した。

「綺麗で人目を引くところが」

……そこは師弟関係で似るとは思えない。というか関係ない。

だがルウの満面の笑みに、褒めてくれているのもあって、リネアは苦笑を浮かべるしかなかった。

やがてシャルーランの到着と共にリネアはルウと別れたが、ルウは最後に最高の言葉を贈ってくれた。

「また遊ぼうね！ もう友達だもん、待ってるよ！」

トモダチ。

ずっと欲しくて、ずっと我慢してたモノ。

リネアは胸が暖かな思いに満たされるのを感じた。

そしてリネアは最高の笑みと一緒に、ルウへ返事をしたのだった。

## 紅の月〈貳〉

三、呼ばれた『存在』

ルウとの出逢いから、リネアは頻繁にクワントの町を訪れていた。毎回シャルランの術で行くのだが、初めて友達を持たたリネアのため、本当は用事がないのにわざわざ連れて行ってくれているのだとリネアは理解していた。

しかしあの日から一カ月、今回は本当に用事がある。何せリネアの昇級試験の日なのだ。

試験まで時間は無いとわかっているが、この町に来たら、まずルウに会いたかった。

「ルウ！」

「あっ、リネア！」

クワントでは他の子供達とも何度となく遊んだが、ルウが一番の友達になっていた。ルウもリネアを親友だと思っているらしく、リネアの来訪をとて喜んでくれた。

「あのね、残念だけど、今は遊べないんだ。用があるから、すぐ行かなくちゃ」

「そっかー、残念。今日はずっと忙しいの？」

「ううん、夕方までだよ。終わったらここに来るから、待っていてくれる？」

「もちろん！ ねえ、今日は私の秘密の場所に連れてってあげる。夕方からが一番綺麗なんだ。楽しみにしててね」

「うん、ありがとう」

その後、昇級試験を受けたリネアは、試験を最優秀の成績で合格した。まだ十にも満たない少女が三位となるのは、異例中の異例ではあったが。

「リネア、お疲れ様。かなり頑張ってたじゃないか」

「師匠。あの、今日は少しでも早く終わらせたくて……」

「いいだろう、行っておいで。私は手続きを済ませておくから」

「すみません、お願いします」

「早く行ってあげなさい。暗くなってしまうよ。後で迎えに行くから」

「ら」

「はい！」

リネアは組合が置かれている古ぼけた石組みの建物を出て、急いで広場へ向かった。すでに空は橙色に染まり始めている。

「ルウ、おまたせ！ どこに連れてってくれるの？」

「よかったあ、間に合わないかと思っちゃったよ。ふふ、場所は着いてからのお楽しみだよ！」

「うん」

「リネア、行こう」

ルウはリネアの手を握ると、駆け足でその場を離れてく。二人が大急ぎで向かった先は、町外れの森だった。

ただし、森と言っても手入れが行き届いており、綺麗な夕焼けが頭上の木々の間から顔をのぞかせる。

が、奥に入れば段々と日暮れも手伝い、暗さが増していく。しかしルウはお構い無しにどんどん森の奥に分け入っていく。

「ルウ、どこまで行くの？ あまり奥に行くのは……」

「大丈夫、もうすぐだから！ それに道もちゃんとついてるし、魔物もないよ。心配しないで大丈夫。あ、もちろん狼とかもいないよ。……多分」  
「多分って……」

どちらにしても、確かに心配はしなくていいだろう。

自分達はきちんと道を通ってきたし、それは一本道。魔物の気配もしないし、狼程度ならいたとしても自分の魔法で対処できる。

なにより、ルウの笑顔に応えたい。

リネアは繋いだ手を、ぎゅっと握り締めた。

やがて二人は円形状の、広場のようになっている所に出た。頭上もここだけ思い切り開けている。

見上げれば、真っ赤な夕日が、この場を血染めの如く染め上げていた。

「ここが私の秘密の場所だよ！ 見て、月下草がいっぱいあるの！」

「うわあ、すごい、綺麗っ……！」

その場を取り囲むかのように、白銀色の蕾たちが緑の蔦を木々にびっしりと絡ませていた。花の名は『月下草』。月光の下に花を開かせることが名の由来だ。

花はシャルランの髪色と似て、なんとも不思議な雰囲気纏っている。もう少しで花が開かれるが、蕾のままでもじゅっぶんに美しい。

「ね？ 来て良かったでしょ！」

「うん！ すごいよ、月下草がこんなに密集して咲いてるなんて。繁殖力が弱くて、蕾をつけるのも大変なのに……」

ふと、リネアは自分で言った言葉が気にかかった。

（そうだ、この花は群集するなんて有り得ない性質のはず。何で、ここでは、こんなにも在るんだろう）

不気味なほどに。

ゾクリ。そう考えた途端、リネアは体中に悪寒が走った。

怖い。今の今まで、その美しさに心奪われていた蕾たちにも、今では恐怖しか感じない。

「ルウ、この花は誰か手入れとかしてるの……？」

かすかな望みにかけ、怖々ながらルウに尋ねる。人の手が加わっているなら、群集して咲く可能性はゼロではない。

「ううん、そんなことないよ。だって誰か知ってたら話題になるに決まってるもん。だけど、誰か見つけたって話は聞いたことないなあ」

ああ、駄目だ。唯一の望みが絶たれてしまった。

（そうだ、この花が滅多に咲かないのは、開花に多大な妖力が必要だからだ！ まだ蕾だけど、こんなにあるってことは……、ここは危ない！）

何も妖力を用いる術者が危険なのではない。シャルランもリネアも、そうした世間一般の評価は馬鹿馬鹿しいと思っっている。哀れにも彼らは、その力の特殊性から異端視されているだけだ。

この場所が危険なのは、純粋な妖力が莫大に在るからだ。純粋な特殊力が何かをきっかけに暴発すれば、どの力であるうと、それは

最悪の凶器。

子供二人など、簡単に消し去る。

「ルウ、ここを離れよう！　ここにいちや駄目だ！」

リネアは得たばかりの位に相応しいその明晰な頭脳で、状況を冷静かつ的確に判断した。

何故、ルウだけがこの場所を見つけたのか。改めて考えてみれば出来過ぎているし、どう考えてもおかしい。

入口から一本道だったと言うのに、誰もここを見つけていない。

これは何かの罠なのだ。自分達をここへ誘うための。理由なんてわからない。けれど、すぐに逃げなければ。

「どうして？　もうすぐ花が開くのに！」

当然、ルウは不思議そうな顔と不機嫌な声で答える。

せっかく自分の秘密の場所に友達を招いたのに、こんな言い草をされたら不機嫌にもなるだろう。

「説明は後でするから！　お願い、ここを離れて！」

半分泣き叫ぶようなリネアの訴えに、ルウがわずかに怯んだ。

だが、よほどここを気に入っているのだろう。今まで握っていたリネアの手を振り解いて、場の中心まで駆けていってしまった。

「ルウ！」

「嫌だよ、何で？　友達でしょ！？　何でそんなこと言うの？　ひどいよりネア！」

ルウの目には涙が浮かんでいる。

仕方がない。自分は相応のことを言っつて、ルウを傷つけてしまったのだから。

だけど、これ以上は、させない。

「ここは危ないんだ、妖力が満ちてる！ 早く離れないと夜が来る、私じゃ守りきれないかもしれない。だから、お願い！」

リネアはルウに駆け寄った。

ルウはわずかに体を引いたが、必死な形相のリネアに問いかけた。

「ど、どうということ……？」

「狙われてるんだ！」

リネアはルウの手を引こうと自分の右手を差し出した。ルウも我が儘を言っている場合ではないと察したらしく、素直に手を差し出す。

二人はしっかりと手を握り締め、来た道を戻ろうと後ろを振り向くが、そこに道は存在していなかった。

「なっ………！」

リネアは息を呑んだ。

まずい。こんな術を使うヤツが相手だなんて。

こういった五感に影響を与える術は、妖力が得意としている。魔力は妖力との相性が悪く、打破は難しい。ただ、ただ。

「ルウ、しっかり手を握っててね。……絶対に離さないで」「うん」

守ってみせる。この命に代えても。自分はこんな時のために、辛い修行を堪えてきたのだ。

いつも、師匠に言われていた。『お前が失いたくないものを手に入れたら、お前の力はそのためだけに使いなさい。ヒトは何かを守るとき、一番強くなれるのだから』と。

（師匠、私はルウを失いたくないです。やっとできた友達を、私は守りたい。だから、言いつけを破っても、いいですよ？）

道があつた場所を見据え、大きく深呼吸する。

リネアは術の確実性と威力を高めるため、普段は行わない呪文詠唱を開始した。

「来たれ炎よ、我が眼前の敵を薙ぎ払え！」

呪文とともに、強力な魔法が放たれる。またたく間に炎が踊り狂い、リネアの眼前の木々を焼き払った。かのように見えた。

「な、に……？」

人など簡単に焼き尽くしてしまうような炎を受けて、木々は何事も無かつたかのように木の葉を揺らす。

リネアは焦りを隠せなかった。

普通に妖術で道を隠したならば、今の魔法でも絶対に何らかの影響が出る。相性の悪いとはいえ、妖術の程度が低いからだ。

何も影響がないと言うことは、これは見たこともない、とても強力な妖術なのだろうか。

「くそつ、もう一度！」

右手に握るルウの手が、微かに震えている。

(そんなの関係ない！ 絶対、絶対守ってみせる！)

「炎よ！ 燃え上がり、全てを無に帰せ！」

先ほどよりも高位の魔法を放つが、それでも変化は無かった。

もう一度、トリネアが呪文の詠唱をしようとしたとき、どこからか声が聞こえた。

「その程度の術で、我が囲いは破れません」

二人が驚いて辺りを見回すと、二人の背後、円の中央に一人の男が立っていた。

端正な容姿だが、雰囲気はどこかおかしい。男には今にも消えてしまいそうな、雲のような儚さがあった。

「誰だ！ なぜ私達をここに閉じ込める！？」

リネアの怒声に怯むことなく、男は慇懃な態度でリネアに対応した。それはまるで、主の怒りを静めるかのような所作だった。

「我らの崇高なる計画のため、あなたの御力が必要なのです。ご安心下さい、無体な真似は致しません」

「何？ 何なの！？ あなた誰なのよ！」

だがリネアが男に答える前に、あまりの恐怖でルウが叫んだ。男はリネアのと看とはガラリと態度を変え、冷酷非情に言い放つ。

「お前などに用は無い。お前がこの方と知り合って無ければ、この

地に近づいた時点で消してやったものを」

はっきりと見て取れる侮蔑の態度に、ルウは恐怖や色々なものがない交ぜになって、泣き出してしまった。

「……くだらない。さあ、我らのもとへ。あなたが必要なのです」

男はとても優しい笑みでリネアの前に跪き、手を差し出した。だが、リネアがその手をとることは無かった。

「あなたが誰かは知らないし、何故私が必要かも知らない。……だけれど、どんな理由があろうと私の道は私が決める！　すぐにこの結界を解きなさい！」

その言葉には、八才の少女とは思えない強さが秘められていた。

男は理解した。凜とした瞳に意思の揺らぎは無い。このままではあの男、賢者がやってきてしまう。

ならば、力づくで。

「手荒な真似はしたくなかったのですが……。仕方ありません。失礼ではありますが、力づくであなたを連れて行く」

男の瞳が怪しく煌く。その後ろでは、太陽が最後の陽光を、断末魔の悲鳴のように赤々と燃やしていた。

一方、町の広場ではシャルランがリネアの姿を探していた。少々手続きに手間取ったが、やっと終えて来たら、日が沈みかけた広場に子供の姿は無い。誰かにリネアの行方を聞こうにも、人の影はまばらだ。

気術を駆使してもいいが、どうもこれだけは苦手だった。道のど真ん中で行えば、微動だにしない自分が不振人物と見られることは

確実である。

「あのう……」

組合に戻るか、とシャルーランが悩んでいたところに、一人の婦人に声をかけてきた。

「はい、何でしょうか？」

「私、ルウの母親のリアと申しますが、リネアちゃんのお師匠様でしょうか？」「ええ。いつも弟子がお世話になっています。どうかされましたか？」

リアに話し掛けられた時点で、シャルーランは、もうルウは家に帰っていると思っていた。

リネアは普通、友達をこんな時間まで連れ回さない。例え相手が望んでも、だ。

「いえ、こちらこそ。あの……失礼ですが、うちの娘をご存じないでしょうか？」

「え？ ご自宅に帰られていないのですか？」

「はい。いつも夕暮れに私がここに迎えに来るのですが、娘が居ないのです。ですから、この頃よく遊んでくれているリネアちゃんと一緒なのかと……」

不安げにうつむく夫人を見て、二人に何かあったのだとシャルーランは瞬時に判断した。

シャルーランの語調が一気に引き締まる。

「実は、リネアもまだ帰らないのです。私はこの町に詳しくありません、二人が行きそうな場所をご存知ですか？」

「ええと……。そう言えばこの前、今度はリネアちゃんを秘密の場所に連れて行くと言っていましたわ。たぶん森の中だと思います」「森ですか。あの町外れの?」

「ええ、ですがあそこは一本道だし……。あ、そうだね。あの子、綺麗な花を見つけたと言っていました。そう、お師匠様の髪色にそっくりな花が沢山あったと」

「私の髪に?」

「そうです。不思議な色らしくて。ええと、何て言ったかしら。月……何とかって花だったような……」

はつきりとした言葉だったが、シャルランにはそれだけで十分だった。

「ご夫人、どうぞご自宅でお待ち下さい。私が二人をむかえに行きますから。よろしいですね?」

「え? ですが……」

「開けていても夜の森です。ご夫人には危険だ。私は魔法使いを修めている身、心配はいりません。では、急ぎますので」

そう矢継ぎ早に言うと、リアの返答を待たず、シャルランは急いでその場を離れた。

(くそっ! 頼む、間に合ってくれ! まさか月下草があるなんて……!)

夜の帳が空を覆いつくす。『その時』は、刻一刻と近づいていた。

## 紅の月へ参る（前書き）

この話には残酷な描写が含まれます。ご注意ください。

## 紅の月へ参

四、目覚めた『力』

繰り出される強力な妖術の数々。その攻撃をリネアは、何とか結界を張ることで防いでいた。あまり得意ではない結界術に全魔力を注ぎ込み、ルウを必死に庇う。

「そのような者、捨て置き下さい。時間が無いのです。もう一度だけ聞きます。……我らのもとへ、来て下さいますね？」

「ふざけるな！ ルウは私の大事な友達だ、お前になど着いていくものか！」

「トモダチ……ですか。無用ですね」

男はより一層、攻撃の手を強める。この場に眠る妖力が、その強力な攻撃を可能としていた。月下草とは妖力を行使する者にとって、妖力の補給場の目印だったのだ。

四方八方から繰り出される妖術に、リネアの結界も段々とその役目を果たせなくなってきた。

魔法では完璧に技量が上回らない限り、相性の悪い妖力を防ぎきれない。

「終わりにしましょう」

男は右手を高く上げ、新たな呪文を唱えた。そこには巨大な光の玉が生じ、強大な力が凝縮されていることは一目で理解できた。

それを無言で二人に投げつけると、耳をつんざくような爆音と共に、大量の砂塵が舞った。男は砂塵が晴れるのを待って二人に近づ

いたが、寸前で歩みを止めた。

「……防ぎきるとは……。流石としか言えませんか」

結界はすでに失われていたものの、二人に目立った怪我は無かった。リネアが最後の力を振り絞り、なんとか攻撃を耐え抜いたのだ。

「期待以上ですが……。残念です。拒まれるなら、死んで頂くしかない」

男の右手に再び光が集った。

それを見てリネアは悟った。もう、防げない。

右手を強く握る。よくわからないけど、自分のせいでこんなことに巻き込んでしまった少女の手を。きつと怨まれる。当然だ。だけど。

「リネア、ごめん……」

謝るべきなのは、自分なのに。

そんなリネアの動揺を知らぬまま、ルウは泣きじゃくりながら言葉が続けた。

「私、がつ……。こん、な場所、見つけ、ちゃっ、だから……。リネアを、連れて、きちちゃっ、だから……！」

繋いだ右手が温かい。この温もりを、失ってなるものか。

「うわあああああ！」

極限まで振り絞った力を、さらに。生きる余力すら投げ出す魂の

絶叫とともに、リネアの中の何かが弾け飛んだ。途端に、魔力の残滓も残っていないと思われたリネアの体から、巨大な火柱が立ち上った。それは天まで突き抜けると、雲の上から炎龍となって男に襲いかかった。

「まだこれほどの力を残しているだと……っ!？」

男は慌てて右手の術を龍に投げつけたが、炎龍には何の効果も無い。むなしく炎に飲み込まれていった。

炎龍は男を飲み込み焼き尽くさんと口を開けて襲い掛かるが、男も負けてはいない。すぐさま呪文を詠唱して地下の水脈を探り当てた。

「ここまでだ！」

水脈の上で術を使い、水を地上に導く。己をいざ飲み込まんとする龍の喉もとに巨大な水柱を命中させると、一撃で炎龍を滅した。

「あなたには本当に驚かされる……」

男も相当体力を消耗したらしく、息を弾ませる。けれども、その程度でリネアとの力関係は何ら変わりなかった。

「これが本当の最後です。消えてください」

男の両手に光が集う。リネアは呆然としながらその様子を見つめていた。

あれだけの威力を有する術、自分達はまさに跡形も無く消えてしまっただろう。

「い、やだ……」

死にたくない。死にたくない。嫌だ。

生きたい。

握り続けていた手を、初めて緩めてしまった。

そうして、辺りは光に包まれた。太陽が地平線に飲み込まれた、その時に。

## 五、覚醒せし『悲劇』

リネアが気づいたとき、辺りは赤だった。

赤いあかい紅い場所。

これが血の海だとわかるのに、そう時間はかからなかった。

だけどわからない。何でこんなに生暖かいのだろう。血って暖かいんだっけ？

頭がうまく働かない。いつも通りに物事が見られない。どうしてだろう。

リネアは起き上がろうとして、右手に何か持っているのに気がついた。疲弊しきった体を起こし、血の海に座り込みながら、それを引き上げた。

それはほんのり暖かく、赤がついているものの、自分の肌と同じような色をしている。先は五つに分かれていて、それぞれ長さが違う。先端には楕円状のツルツルしたものが全てについている。

だんだんと意識が覚醒してきた。

(これは何？ これは、こんな形をしているものと言ったら……)

「人の、手……?」

「その通りですよ。お目覚めですか、我が君」

後ろから、誰かの声がした。聞き覚えがある。誰だろう?

「あなたは目覚められたのです。二つの界王の血を引く、『禁忌の子』として」

五つある世界、五人の界王。人々からは神の如く扱われ、子を成さずとも特殊な方法で代を重ねることが出来る。

しかし、民と交わり子を成すことも可能である。ただ、他世界の血族との婚姻だけは禁じられていた。他の血族と交われば、その子供は計り知れない力を持つとして。

そんな掟が遵守され続けてきた中で、当代の魔王がこの掟を破った。偶然見初めた天王の末娘と恋に落ち、子を成したのだ。

天王はこれに激怒し、娘を軟禁状態とした。せめてもの情けか子は魔王に渡し、以後の連絡を絶った。

この一連の事件を『禁忌の変』、生まれ落ちた子を『禁忌の子』と呼ぶ。この世の誰もが知っている、史上最大の罪であった。

「わた……しが?」

「ええ。その後なんと魔王は自分の手ではあなたを育てられぬと言つて人王に預け、その人王も手を余して賢者に預けた、と言つわけです」

だんだんと、視界が晴れていく。ぼんやりとしていた男の姿が、はつきりと目に映る。この、男は……。

「それにしても見事ですな。あの攻撃でもあなたは無傷だ」

あなたは。他に誰が？ 他に……？

「ルウ」

その名を口にした途端、リネアの身体に全ての感覚が戻った。

この男はさつき自分達を襲ってきた男だ。先ほどとは違い、臍のような姿になっているけれど。

（そうだ、ルウは？）

途端に右手に持っていたものが重さを増す。

これは、人の、腕。

「いやああああああああっ！！！！」

血の海の中に、無惨にも数多の肉片となった少女の首が転がっていた。

「いやだ、ルウ！ 何で、何でえ！！」

「覚えておられないのですね。あなたの目覚めの余波で、ソレは吹き飛んだのですよ」

さも嬉しそうに語る男。 今、何て？

「私の、目覚め、の、余波……？」

「ええ。あなたの生きたいという気持ちに呼応し、界王力が発動したのです。界王力は生命の危機に瀕すると、自ずと発動するといいます。まあ、うまく制御が出来なかったのでしょう」

「じゃあ……私、が、ルウを殺した……？」

「結果的には」

守りたかった。失いたくなかったのに。自分と離れて『他者』と  
なってしまったルウ。

あの時、手を離さなければ。

「さあ、参りましょう。どうぞお手を」

男が跪き、リネアに手を差し出した。

「無礼の数々、どうかお許しを。我らは天界に住まう幻影族。この  
世を変革すべく、立ち上がった次第です」

深々と頭を下げた男の言葉など、リネアの耳には届いていなかった。

渦巻くのは自責の念。自分のために少女は死んだ。私がいたから、  
殺してしまった。

リネアは一筋の涙を流した。

男の顔を見つめる。瞳の中に、今の自分の姿を見た。

赤く染まる体。星々の如く輝く銀髪、月もかくやという黄金の瞳。  
これが『禁忌の子』か。これが世界中の人々から疎まれる存在の姿  
か。

「どうなさいました？」

いつまで経っても自分の手をとらないリネアをいぶかしみ、男が  
声をかけてきた。

「そうか、そうだったんだ……」

「？」

自分は人間ではないから魔力があり、上達も早い。きっと師匠のもとで監視されていたのだろう。史上最強の、賢者の下で。

危険だから。自分は世界を滅ぼしてもおかしくない存在だから。

(だからいつも仲間はずれにされた。当然だ、私はチガウから。親にも捨てられて。純粹に私を必要としてくれた友を殺してまで、私は生きている。私が望んだから。生きたかったから)

自分が望めば何でも叶うらしい。世界を滅ぼすことだって。

「はは、ははは……。そっかあ、そうだったんだ!」

「何を……?」

次の瞬間、男の身体から血飛沫があがった。

「……は?」

次々と間をおかずに、男の身体が切り刻まれていく。

腹、頬、背、指、脛、胸、腕、腿、首。全てが赤く染まる。

「う、うわあああああ!」

何が起きたのか理解できないまま、突然襲った激痛に、男はその場に倒れこんだ。

リネアは喚きちらす男には一瞥もくれず、何も起きていないかのようにその場を去り、目的の場所に向かった。

そこで『それ』を拾い上げると、何より愛おしそうに抱きしめた。

「ルウ、ごめんね? 痛かったよね。ごめんね……」

リネアが頬擦りする。『それ』は、ルウの首だった。血でべつとりと赤くなつた栗色の髪を手ですき、よどんだ緑の瞳を見つめる。

「終わらせるから。もう全部終わらせるよ。ごめんね。すぐやるから」

まずはこれを黙らせよう。リネアは喚き叫んでいる男に向き直つた。

「嫌だ、やめろおおお！」

男は理解し、恐怖した。

今、この場の支配者は、目の前にいる。さつきまでは完璧に自分が場の支配者だった。それなのに。

死だ。この先は死だけ。この年端もいかぬ少女が司るものは破滅。銀系のような髪が背にした月光を反射して、リネアは女神の如き姿だった。血にまみれても、その腕に友の首を抱こつとも、なお神々しくて。

月下に降臨せし、幼き血塗れの女神。

その姿を目蓋の裏に焼き付けた男の叫びは、むなしく空に溶けていった。存在の証など、何も残せず。

夜空には、森に広がる血を浴びたかのような紅い月が、燦然と輝いていた。

「さ、始めよう。全部終われば、もう、何も怖くないよね……？」

リネアはルウだったモノを抱きしめる。かすかに震えながら、身体の奥底から自然と紡がれる呪文を唱えていた。

これは滅びの調べ。界王と血族のみが扱える、自身の全てを

出し切る究極の相殺呪文だ。二つの界王の血を引き、なおかつ反発しあつて強まるリネアが使えば、世界が消える。

(もう誰も私を望まないと知ったから。恐怖と共に消えてあげる)

呪文はやがて、最後の節に入った。刻一刻と、世界の終わりが近づいている。勘のいい動物達は騒ぎたて、狂つたように鳴き叫んでいる。

だけどリネアには、何も聞こえない。何も見えない。何も……。

「やめろっ！ リネア、死なないでくれ！」

駆けてくる白き賢者。

何でだろう。自分は……。

(全部、失つたのに)

シャルーランは臆することなく、リネアを『それ』ごと思い切り抱きしめた。瞠目したリネアは、呪文の詠唱を止める。すると張り詰めていた緊張感は途端に消え去り、目前に迫っていた世界の消失は回避されたのだった。

賢者シャルーランとて、この場で何が起きたか、その全てはわからない。だがリネアが目覚め、友を失つたことだけは事実。そして世界と共に消えようとしていたことも。

シャルーランは自分が死ぬのも世界が滅ぶのも、そんなことはどうでもよかった。抱きしめたのは、世界を守るためではない。ただ……ただリネアが、泣いていたから。

誰が死のうが構わない。でも、リネアが死ぬのは耐えられない。あまりにも辛い運命を背負つた子が、自ら死ぬなんて。

「私にはお前が必要なんだ。頼む、死なないでくれ」

最初は人王からの預かり物としてしか見ていなかった。友人である魔王の子だから、少しは情をかけるつもりではあったけど。

確かにあいつに似て聡明で。だけどやっぱり別人なのだ。子供はくるくる動き回って、様々な表情を見せる。最初はその奔放さを疎んだこともあったが、そんな気持ちはすぐに消えた。

愛しい。この小さな命が。世界中から拒まれる運命のこの子が。ただの弟子以上に、まるで娘のように愛しい。ヒトに対する愛を知らない自分が、初めて愛おしいと思えた存在。

「死ぬな。私がいるから。私はお前にいて欲しいんだ」

賢者である自分が、八才の子供に縋る気持ちだなんて。傍から見れば滑稽以外の何者でもあるまい。しかし、これ以外何も出来ない。

「し、しょう……」

リネアがシャルーランを呼んだ。声色は乾ききって、胸を締め付けるものだったけれど。

「……どうした？」

シャルーランは手を緩め、リネアの顔を見つめる。リネアの手には未だ『それ』が抱えられたまま。

「私は、生きていていいんですか……？」

「当然だ。いや、いてくれ。私のために。私はお前にいて欲しい。

……頼む」

シャルーランの言葉を聞いて、リネアの頬を涙が伝った。

「帰ろう。帰ったら、全てを話す。お前のこと、私が預かった経緯、全てを話すよ。だから……一緒に帰ろう」

リネアの肩が震えだす。シャルーランは何も言わずその肩を強く抱いた。

「わたし、殺してしまった。ルウを、殺してしまった！ 師匠、どうすればいいですか。おね、がいです……。おし、えて、……っ」

そこまで言うと、リネアはわっと泣き出した。ゴトリと手から『それが、ルウの首が転げ落ちる。』

シャルーランはリネアの背中を優しく撫でながら言った。

「忘れないでいることだ。忘れないで、ずっと思っていてあげなさい。そして、お前は必死に生きなさい。お前が生き続けければ、心の中でこの子も生きていられるから……。そして強くなれ。旅に出るんだ、この世を正すために。そうして初めてこの子も浮かばれるだろう。世界の歪みの被害者なのだから」

「……は、い……」

リネアは一頻り泣きじやくると、力を使い果たした疲れもあつてか、そのまま気を失うように眠ってしまった。

シャルーランは寝入ったリネアを抱き上げると、ゆっくりと立ち上がった。

(こんな目覚めをむかえてしまうなんて……)

こんな事態を想定していなかったわけではない。どんな事態にも対応できるように備えてきた。

それでも、リネアを目覚めさせるつもりはなかった。魔法を教えるのも身を守る程度に留め、出来たら、一生を普通の人間として穏やかに暮らしてほしかった。

賢者である自分とではそれも限界があると分かっていたので、適当な時期にこの位を捨て、ただの人に帰って『親子』となり、一緒に暮らすのもいいとさえ思っていた。それ位、リネアとの生活は大切なものだったのだ。

それなのに。

リネアは一生の心の傷を負い、最悪の形で目覚めた。これからも心の動揺がもとで力を発動させてしまうことがあるだろう。

（もつと、もつと強くなれ。お前にはもう、平穩はやってこない。これからは、試練しかない。だから、立ち向かう、抗う力を少しでも……）

私の全てをお前に捧げよう。そのために私は賢者でいる。権力という最も愚かで強い力をもって、お前を守るために。

やがて一陣の風が過ぎざると、二人の影は森から消えていた。

すべてを、紅の月だけが見つめていた。

## 紅の月〈終〉

六、旅立つ『戦士』

ここはアスケイルのとある山中、賢者の塔。  
見事な黒髪を頭の上で一つに結った少女が、白銀の髪 of 男性から一本の杖を受け取った。

「これがあれば心配は要らない。特上の魔精石だ。余分な魔力を抑えてくれる」

「はい、ありがとうございます」

少女はリネアだった。

あれから、既に七年の時間が過ぎていた。この七年で更に美しく成長したりネアは、十才で準修士となり、魔法使いを修めていた。それはシャルランに次ぐ快挙であり、異例でもある。

また、師の賢者シャルランは年を重ねることにその知謀を冴え渡らせ、史上最強の賢者として人々の話題の的となった。

しかし彼にリネアという弟子がいることは世間には知られず、また知る者も決して口外しようとしなかった。

「師匠、今までお世話になりました」

「ああ、元気だな。いつでも連絡しなさい。待っているから」

その言葉に微笑みだけを返し、リネアはシャルランに背を向け、広い世界へと旅立っていった。これから、長くつらい旅が始まるのだ。己の誇りと魂、世界の存亡を賭けた旅が。

「……元気で、な」

今日もまた、一陣の風が吹き抜ける。

あの日からリネアは修行に明け暮れた。得手とする魔法だけではない。もう一つの強大な力である法術、または体術や剣術などの様々な武術。

その他にも賢者シャルランが持つ知識を、それすら不足と思えば、持てる人脈を駆使してリネアに全てを伝えたのだ。

あの日より前でも、もちろん魔法以外の修業も行っていた。しかし、あくまでも基礎のみ。あの日から、修行内容はその様相をがらりと変えた。

単に質や量が増しただけではない。それまでの『学ぶ』余裕が消え、血反吐を吐きながら、狂う一歩手前まで己を追い込んで、頭と身体に全てを叩き込んだのだ。

覚悟を決めたりネアは、決して泣かなかった。リネアは友の血の海に沈んだあの時が、脳裏に焼き付いて消えない。自分が殺した、優しい少女の姿。

すべてはあの日の誓いのため。生きるために。

シャルランはあの事件の翌日、リネアに全てを話した。世界を巡る話は、とても壮大だったが、全てを理解したりネアは、ただ一言を述べた。

「私は……、行きます」

自分は狙われている。シャルランと共にいれば、そう簡単に相手も手出しはしない。でも、ここには居られない。守られてばかりでは、真実を知らずに、安穩と暮らしてなどいられない。

だから、旅立ちまでに強くならなければ。

強い意思を取り戻した瞳に、シャルランは胸の痛みを押し隠して頷いた。

リネアはいつか旅立たつ。それは予期していたことだった。

賢者の位を得たとき、初めて手にした『界王の書』。そこに記されていたのは、界王の剣を得た者が『魂を共にする仲間』と世界の歪みを正す、という予言。未来。真実。

その七人の仲間も、抽象的ではあるが、きちんと一人ずつ記されていた。その中の『二極の狭間にある者』がリネアでなければいいと、リネアに出会ってから、どれだけ願ったことか。

だが、もう世界は歪みきつている。皮肉にも、禁忌の子こそ、その証だ。界王の剣も、すぐに目覚めるだろう。

リネアが決意した瞬間は、これまでの夢のような、ぬるま湯のような、そんな穏やかな生活が音を立てて崩れ去った瞬間だった。

シャルランはリネアが見えなくなるまで塔の入り口に立ち尽くしていたが、ふと、七年前のことを思い出し、思わずため息をこぼした。

あの夜。リネアを塔の自室に寝かせた後、シャルランはルウの両親に会いに行った。だが、それは真実を伝えるためではない。森に迷い込んだ魔物に二人は襲われたと嘘をつくためだ。

そのため前もって、適当な魔物を殺しておいた。これを自分が倒したが、ルウを助けるのは間に合わなかった、と言い繕うために。

何もしていない魔物の命を奪い、泣き叫び悲しむルウの両親の隣りで、嘘を重ね続けた。リネアのためだと思えば良心の呵責など無く、すんなりと事は運んだ。せめてもの哀れみで、ルウの遺体は怪しまれない程度に繕って返した。流石に細切れの肉片と生首を両親に見せるのは忍びなかった。

だが、今になって思う。あれで正しかったのだろうか。リネアにも嘘をついたのだ。自分が真実を話したから、お前は行かなくていい、と。

あの時のリネアの表情を忘れられない。ほつとしたような、悲しみにくれたような……。

ただ、この嘘を正す気はない。この先、一生だ。リネアの悲しみ

が、大きくなることだけは確かだから。

例えその先に光が待ってようとも、これが一時の悲しみであろうとも。

(……。リネア、本当は分かっていたのだろうか?)

私の愚かな嘘にすがってしまっくらい、絶望の淵にいたお前でも、いや、そんなお前だからこそ。

「……師匠？」

聞こえるはずのない、シャルランの声を聞いた気がして、リネアは後ろを振り向いた。

リネアは今、塔のある山からの風を受けながら街道を歩いていた。七年前の、あの日に思いを馳せる。自分が奪った命、犯した罪。消えることは無い。忘れることも無い。胸にしっかりと刻み込み、前に進むだけ。

たった一つの救い。それは惨劇から一夜明けた朝、シャルランが約束通り全てを話してくれたことだ。

「魔王とは賢者になる前からの友人だ。最初に渡った世界の界王で、年齢が一緒だったこともあって仲良くなったんだ。魔法使いはすでに修めていたしな」

その縁でリネアを預かったが、人界にいる自分に直接預けると騒ぎが大きくなるので、人王に一時的に預けたこと。本来ならば一年だけの約束が、魔王と連絡が途絶えたことで現在まで続いていること。それが界王力を抑える界王石が、リネアの手にはない理由だった。また、魔王が我が子を手放した理由。それはリネアを守るため

あった。魔界ではリネアの法力や頬の紋様により、禁忌の子だとも目で判別できてしまう。父である魔王は、我が子に常日頃から忌み嫌われるような、凄惨な暮らしを送らせまいとしたのだ。

それからシャルーランの知る限りの、父母の話。賢者であるシャルーランは、他世界の界王という枠組みを超えて、多様な友好関係を築いていた。

最後に、リネア自身の力の強大さを。

「お前のもつ界王力が暴走すれば、簡単に世界が消し飛ぶ。反発しあう二極の血のために、その力は容易く暴走するだろう」

そう話した直後、リネアはシャルーランの強力な魔法によって、今までの姿、黒髪黒眼に戻った。本来の姿とともに、界王力はシャルーランの全力で、けれど一度目覚めたために、今までより格段に弱く、封じられた。

ただ、正確には魔法で色が変わったのは瞳だけである。髪と瞳の色は界王の血族である証。それを二つも変えることは、賢者として容易ではなかった。そのためシャルーランは己の一部を捧げることで、リネアの髪色を変化させたのだ。よってリネアが本来の姿を取り戻せば、シャルーランの白髪も本来の黒髪に戻る。

また、特殊力は攻撃面に優れた魔力だけを用いたが、それすら強すぎて、成長に従い抑える必要が生じた。

その鍵となる石こそ、この手にある魔精石だ。これは魔力を抑え、自身に溜め込んで昇華させる性質がある大変貴重な石。シャルーランが友人であるアスケイル王から譲り受けたものだ。

紫色に輝く石に指を這わせながら、リネアは空を見上げた。

(……ルウ)

やってみせる。この世の歪み、必ず正す。

そのためには、まず。

『仲間を探しなさい。最早この世は歪みきった。ならば界王の剣を得る者が必ず現れる。その者のもとに、在るべき仲間が集うだろう。その魂を共にする仲間と共に、世界を巡りなさい』

師匠が告げた言葉どおりに。

(ルウ、見ている？ 私は生きている。私は進むよ。あなたのためにも、自分のためにも)

やがて、小さな町が見えてきた。自分を幼い頃から世話してくれた人たちが暮らす、最も馴染み深い町。

恐らく、二度と訪れまい。

自分はもう旅立った。戻ってしまえば、それは何かから逃げたことになる。

(私のいる場所、帰る家は……どこにもない)

シャルランは自分を愛してくれている。自分が賢者の塔に戻れば、喜んで迎え入れるだろう。

けれど、違うのだ。

あそこは旅立つべき場所。鳥が巣立ちをするように、二度とそこには帰れない。戻っても、帰らない。

もちろん寂しい。けれど自ら退路を断たなければ、苦しさから歩みを止めてしまうだろう。

(師匠……。行って参ります)

もう一度心の中でシャルランに別れを告げると、リネアは足早

に町へ向かっていった。

『世界がお前を否定しても、運命はお前を生み出した。その意味はお前が作り出せ』

真実が告げられた朝、シャルランが言ってくれた言葉を胸に抱きながら。

七、そして『始まった』

旅立ちから三年後、リネアはアスケイルのとある町で、町に被害を与えるという魔物の存在を知った。

本来ならば森の獣を食料とする小型の魔物だ。これも世界の歪みもたらしたものだ。逃げ切れない義務感から、リネアは魔物を追い払うため、一人で夜の森に入って行った。

そこで出逢う。運命をともしにする仲間、二人の青年に。

一人は金の髪で、いかにも純朴そうな青年。不釣り合いな剣を佩き、魔物に立ち向かっていた。

もう一人は黒髪の精悍な青年だ。武闘家らしく、素手で魔物に対していた。

しかし、二人は魔物に押され気味だった。リネアは簡単な魔法で金の髪の青年を救うと、術の足手まといだと判断し、迷わずそう告げた。

「ここは私が引き受ける。退いてくれ」

青年たちはほとほと魔物に困っていたらしく、すぐに言われた通り森を出て行った。しかし魔物を追い払ったリネアが森を出ると、

何故か青年たちがそこで待っていたのだった。

「さっきはありがとう。数が多くて困ってたんだ」  
「礼はいらない。では」

どうやら彼らは、礼儀正しく、助けたりネアに礼を述べるために残っていたらしい。だが、リネアは余計な関わりを持つのが嫌で、すぐにその場を去ろうとした。

が、突然、金の髪の青年が叫び声を上げた。

「ああ！ やばいよ、どうしよう！」

半分は勢いに飲まれた形で青年たちの話を聞けば、黒髪の青年が旅に出る許可を貰うため、二人で魔物を退治しに来たらしい。その魔物退治をリネアがやってしまった、という訳だ。

困り果てた青年たちの様子を見て、リネアは言った。

「ならば私に手伝いを頼んだことにすればいいだろう」

極力、人と関わらないようにしてきた自分が口にした言葉に、リネアは心の底から驚いた。

ただ、その言葉に大喜びして、やった、とはしゃぎ回る青年たちに、嫌悪感は微塵もなかった。だから、それが自ら協力を持ち掛けた理由なのだと、その時は思った。

やがて町に戻り、黒髪の青年に旅の許可が出ると、金の髪の青年がリネアに声をかけてきた。

「ねえ、僕達と一緒に旅をしない？」

「断る。他をあた……」

他を当たれ。そう言うつもりだった。得れば失ってしまうから。もう、二度とあんな思いはしたくなかったから。

その時、ふと青年の剣がリネアの目に留まった。

この形、伝え聞いたあの剣、その物だ！

「そうか、この剣。お前が……」

興奮のあまり、つい口を滑らせてしまった。

でも、見つけた。界王の剣を得た者を、やっと。

(……ルウ、見つけたよ)

その後の会話は、興奮していたせいで、ろくに覚えていなかった。

数日後、リネアは二人と旅を共にしていた。

「リネア、町が見えたぜ」

黒髪の青年、セルグが話しかけてくる。金の髪の青年アルフォンヌも、乗り合わせていた馬車の荷台から顔をのぞかせた。

「さ、行こうか！」

やがて旅を続け、得た仲間が七人。総勢八人の賑やかな旅を続け、ついにたどり着いた。

「ここが……」

誰からともなく、ため息が漏れる。見上げてもまだ果てが見えない、巨大な扉。これをくぐれば他世界に行ける。果ては、界王の間へ。

まだまだこれからだけど。やっと自分はここに来た。これから始まるんだ。

「リネア、行こう」

今、自分に声をかけたのは誰だ？ 遠い記憶の彼方に、私はこの声を聞いた。

「何やってんだ、行こうぜリネア」

「……ああ、今行く」

この扉をくぐって、次の光が見えたなら。天国のあなたは、きっと優しく微笑んでくれる。遠い記憶の彼方で、笑っていたように。

そうだよね？ ルウ。

## 全ての始まりへ前編：セルグ

全ての始まりは、俺が八歳になったとき。そう、ずっと楽しみにしていた親父の商売に、初めて連れて行ってもらった時だった。

道中の隊商宿で休んでいたとき、セルグは隊の頭である父に声をかけた。

「なあ親父、町に着いたら俺にも仕事やらせてくれよな！」

「おう。品出しに片付け、しっかり働いてもらうさ」

「ええっ、それだけかよ？」

「あたり前だ。お前に客の相手はまだ早い。ま、働きぶりによっちゃあ手伝わせてやるかな」

「おう！ 約束だぜ！」

父ブラッドが率いるこの隊商は、歴史あるジープの中でも特に由緒のある隊商だ。常に良心的な商売を誇りとしていて、お客からの信頼は厚い。

だからセルグ自身も、すぐに大事な商売を手伝わせて貰えるとは最初から思っではいなかった。

やがて出発から幾日かが経ち、取引をする町の手前までやって来た。町を見下ろす、見晴らしのいい丘に今夜の場所をとる。

町にある門が閉じる時刻に、今なら全速力で行けば何とか間に合うだろう。しかしそれでは本番前だというのに疲労がたまってしまう。だがそれも予定の内。ブラッドが隊員に夜営の号令をかけた。こうして隊は明日へ向けて、早めに床へ着く用意を始めたのだ。

(うゝ…。便所…)

陽が西に大きく傾いたころ、一人で隊を離れる影があった。明日への緊張のせいで、どうも落ち着いていられないセルグだ。

「　　つぶ…」

セルグは用を足した後、ふと空を見上げた。

そこにあるのは鮮血の如く、紅いあかい赤い空。沈んでいく夕日はまるで、地平線に飲み込まれていく断末魔の悲鳴のよう。

(……………すげえ……………)

まるでこの世の終わりのように。世界全てが燃え尽きるかの如く。あまりの雄大さと美しさに、幼いセルグは恐怖にも似た心地を覚えた。

(……………。戻ろ)

この隊商は規模が大きいので、盗賊に襲われることは少ない。護衛の用心棒もいるし、隊員も簡単にやられるような人物はいない。それでもこれから迎える夜の暗闇の中、子供一人でフラフラしているのは危険だ。

そう考えて野営地に帰ろうとしたところで、セルグは後ろから声をかけられた。

「坊ちゃん、こんなところで何してんですかい？」

「ロイ」

このロイという人物は去年から隊に雇われている用心棒で、まだ

二十歳という若さなのに、非常に腕がたつ。

おまけに気さくで明るい性格は、セルグも含め、みんなから好かれている。

「町も近いし、もう心配はいらねえと思いやすが……。坊ちゃんが迷子にでもなったら、俺が旦那に殺されちまいますよ」

「こんなところで迷子になんてならねえよ！ それに坊ちゃんって言うな！」

「ははっ、まあそんなに怒らないで下せえよ。じゃあ若旦那、しがない用心棒の頼みを聞いてくれやすかね」

「……何だよ」

「明日からは大仕事ですし、もう戻って下せえ。みんな夕食の用意に取りかかってますよ」

「……」

今の今までは、すぐ戻るつもりだったのだが。ここで素直に頷いたら何かつまらない。

(……そうだ)

「ロイと話してるほうが暇つぶしになる。しばらく話に付き合えよ」

「ええっ！？ ちつと勘弁して下さいよ……。それに夕食の用意は？」

「今日は俺、当番じゃねえもん。な？」

「はあ……。けど俺に何を話せてんですか。聞いて楽しい話なんかありませんよ」

「いいじゃん、何か一つくらいあんだろ？ 例えばここにくる前の話とかさ」

「うーん……」

そうロイが呟いたと同時に、遙か遠くで最後の残光が地平線に飲み込まれた。

その時。

「「!?!」」

突如、全ての感覚を凍りつかせた波動と衝撃。

そこから感じるのは生物全てが知る、純粹な恐怖。行きつくものはただ一つ。

『死』のみ。

「坊ちゃん、隊に戻りやすよ!!」

「えっ、あ……」

突然の感覚に硬直したセルグをひっぱり、ロイは隊に向かって駆け出した。仮にも用心棒を生業として生きてきた身、この感覚、この恐怖には覚えがある。

(ちきしょう、間に合ってくれよ!!)

丘に着いた時、まだ隊に目立った異変は生じていなかった。

「旦那!」

「ロイ! なんだ今のは!?!」

「俺にもハッキリたあわかりやせんが、すぐに荷をまとめて下せえ!」

「待て、夜の移動が危険なのはお前もよく知っているだろう?」

「旦那、移動じゃねえ、避難でさあ！俺の感覚が正しきやあ、あれは……」

血の気が引いていくロイの顔。握りしめられたままのセルグの右手が、潰れそうにきしんだ。

「痛え！ロイ、離してくれよ」

「あつ……。すみません」

「ロイ、さっきのは何だった？」

「旦那……。あれは、あれはきつと……」

ロイの口が強く引き締められる。

先ほどの感覚に不安を覚えたらしい隊員たちも周りに集まってきている。

「どうしたんだよロイ。魔物でもくるってのか？」

まさか、と別の誰かが漏らした。

最近は何故か出没数が増えてきたとは言え、隊の道程には出たことがないし、このあたりは特に安全な地域だ。

しかしその言葉に何も返せず、青を通り越して白くなっていくロイの顔に、誰もが言葉を失った。

気がつけば今は夜なのに、悲鳴にも等しい動物の鳴き声が闇夜にこだましている。

「……。本当なんだな、ロイ」

「……………はい、旦那」

その瞬間、隊員たちは火がついたかのような混乱状態に陥った。

「い、嫌だあ！俺は喰われたくねえ！！」  
「町だ！町の中に逃げ込むんだ！！」

普段の統率がとれた姿とは似ても似つかない、恐怖に慄いた彼らに、セルグはただ怯えるしかなかった。だが。

「うるたえるな！！！」

隊商の頭、ブラッドの一喝。堂々たるその大音声に、全ての動きが停止した。

「魔物の真偽は図りかねるが、やけに不気味なのは確かだ。町に避難する、すぐに荷をまとめる！夜道の用意も怠るな！！」

不安を吹き飛ばすような大音声に、一拍の間を置いて隊員たちは素早く行動を開始した。彼らの動きに、もう迷いはない。

「ロイ！」

「は、はい！」

「お前はセルグを離すなよ。異変があればすぐに伝える」

「承知しやした」

「魔物についてはお前だけが頼りだ。頼んだぞ」

「はい！！」

目の前でめまぐるしく変化する事態に対処できないまま、セルグはロイに手を引かれて移動の用意を始めた。と言っても、手が震えて上手く物が掴めない。ロイに手渡されたものを落とさないようにしているのが精いっぱいだった。

「ロイ……」

「なんですか、坊ちゃん」

「坊ちゃんて言うな！……なあ、本当に魔物、くるのか？」

「……。この隊を襲ったあ限りやせんよ。さ、急ぎましょう」

(じゃあ……。来るんだ)

こんな時ほど子供は頭がよくまわる。セルグは自然と事実を受け入れた。

やがて二人も合流し、隊が動き出してすぐのこと。

「うわっ、地震だ！」

「デカイぞ！！！」

先ほどとは違い、隊員たちは落ち着いて行動をとる。めいめいが落馬して怪我をしないよう、手際よく馬から降りたところで、ロイが叫んだ。

「みんな動くな！！　来るぞっ！！！」

叫ぶと同時に腰の曲剣を抜き放ち、揺れ続ける大地に目を凝らした。

やがて揺れが収まったかに思ったその瞬間。

「　はあっ！！！」

地面から突き出した何かを、ロイは剣で斬った。

ゴトン、と音を立てて落ちたそれは頭。巨大な百足のような、大人の体くらいある大きな頭だった。

「魔物……っ」

誰かが呟く。

まだピクピクと痙攣しているソレから、どす黒い血が流れ出していた。

「旦那、魔物は俺が引き受けやす！ 揺れが収まってるうちに早く！！」

「……っ！ 全員騎乗！！ 町まで全速力で駆け抜ける！ 荷は捨てて構わん！！」

「承知！！」

「セルグ、お前はこっちだ！」

「親父っ、ロイは？！」

「これがあいつの仕事だ！ 邪魔をするんじゃない！！」

今までに見たことのない父の必至な形相に、セルグは言葉を失った。

「乗れっ！！」

ぐい、と馬の上に引き上げられる。馬も極度の興奮状態にあり、走り出さないよう抑えているのがやっとのようだ。

「ハイヤッ！」

ブラッドが鞭を入れると、馬は矢のように駆け出した。

(ロイ……！！)

いくら仕事と言われようが、心配せずにはいられない。

セルグが馬上から後ろを見ると、そこには心臓が凍りつくような

光景が広がっていた。

「ロイ ツ!!!」

「なっ、セルグ!!!」

セルグは走る馬からまるでぶよぶよに飛び降りると、ロイのほうに駆け出した。

ブラッドは驚いて馬を止めようとしたが、恐怖に駆られた馬は速度を緩めることなく突き進んでいく。

「ロイ、ロイツ!!!」

ロイは剣を振るい続けていたが、そこには両の手でも数えきれないほどの魔物が襲いかかっていた。

魔物たちは最初にやられた仲間の血に興奮し、理性の欠片まで失い、その血が付着した剣を振るうロイに狙いを定め次々に襲いかかる。

「ロイツ、もうやめろよ! 死んじまう!!!」

「坊ちゃん!? 何で戻って……!? 早く町へ!」

思わぬ人物の登場に、ロイは度肝を抜かれた。なぜ居るのは分からないが、これはマズい。

「絶対に嫌だっ!!! それに坊ちゃんと呼ぶなって言っただろ!?!」

「危ない!!!」

ブンツ、とセルグの頭上で、剣が横薙に払われた。セルグの頭に生暖かいものが降り注ぐ。魔物の血だ。

「しまっ…!!」

これではセルグも魔物に狙われてしまう。最悪の事態だ。

「いいから、ロイ！ 逃げよう!!」

「駄目でああ！ ここで逃げたらコイツらも町まで来ちまいやす！  
！ ここで…っ、食い止めるしか…!!」

次々と地中から現れる魔物を斬り伏せながら、ロイは必至で考えを巡らせた。

この魔物は図体はデカいが動きが鈍く、落ち着いて対処すれば大丈夫だ。死ぬことはない。

(しかし坊ちゃんをどうするんでき…!!)

いくら何でも、これ以上魔物が出てきたら守りきれない。べつとりと付着した血で、剣の切れ味も落ちてきている。

「……くそっ！ 坊ちゃん、絶対に離れねえで下せえよ!!」

「わかった！ けど坊ちゃんて呼ぶな!!」

「ようし、その意気でさあ!!」

だんだんと斬れなくなっていく剣、振るう力を失っていく腕。

それでもロイはその場に踏みとどまった。それは己への過信でもなければ、賃金のためでもない。血に染まった剣を振るうのは、ただ応えるためだ。

隊からの信頼に、幼い主の好意に。

## 全ての始まり〈後編〉

「坊ちゃん、右によけて!!」

セルグがロイに駆け寄ってから、斬った魔物の数はもう二十を越えていた。魔物から落ちた頭は、すでに山のように積まれている。ロイの手からはすでに力が抜け、もう根性だけで剣を握り締めていた。

その時少しだけ、魔物の勢いが引いた。

(今なら坊ちゃんだけでも逃がせるか……!!?)

そう思ってロイが振り向いた瞬間。

「えっ」

セルグが月明かりの中に舞った。

「坊ちゃん!!!!!!」

土中から突き出し、セルグを空に跳ね上げた魔物は月光を浴び、不気味に輝いた。

ロイは長く伸びたその体躯を断とうとしたが、他の魔物に進路を塞がれてしまった。

(ああ。俺、喰われんのか)

空中に跳ね上げられてから、セルグの時間はやけにゆっくり過ぎていく。

(今日の夕焼け空みたいな色だ)

月明かりで魔物の赤い口内がはっきり見える。ぐんぐんと近づいていく赤。

いきなり死に直面すると、人は異様に冷静になるんだな。赤を見ながら、セルグはそう思った。

そして大きく開けられた口に、セルグは飲み込まれた。

と、二人とも思ったその時。突如、魔物が悲鳴を上げてのけぞった。

「えっ？」

「怪我はありませんか？」

セルグはいつの間にか見知らぬ壮年の男性に抱えられ、地面に降りていた。

わけの分からぬまま、セルグは地に足が着くと同時にロイのもとへ駆け出した。

「坊ちゃん!!」

「ロイ!!」

目の前の魔物を薙払い、ロイもセルグに駆け寄ってきた。ロイはセルグを強く抱き締める。

「よかつ、よかつた。よくご無事で……っ!!」

「あのオジサンが助けてくれたんだ! ……よね?」

「ええ。お二人とも、そこを動かないで下さいね」

言い終わるか否かの内に、ビュン、とセルグの頭上に風が起こっ

た。

すると、いつの間にか背後に迫っていた魔物が、三匹同時に地に伏していた。

男性は手に何も武器を持っていない。動いた様子すらセルグは見えないのに、魔物の体躯が一刀両断されている。

「ここは私にお任せを」

男性はそう言うと、一跳足でひときわ巨大な魔物の頭まで飛び上がった。

「南無」

常人には目で追うことも許されぬ速さで。男性は魔物の頭を切り落とした。

(武器もないのにどうやって!？ それにいつ動いてんだよ?!！)

訳がわからない。この魔物は、親父も手放しで賞賛するロイでも、一断ちで頭を落とせるかどうかだったのに。

何故この男性は素手で、しかも一度に複数を仕留められるというのか。

「ロイ……。あのオジサン、何なんだよ？」

何者なんだよ、と聞けなかったところがセルグの困惑っ振りを如実に表しているであろう。

聞かれたロイもロイで、返答に詰まってしまった。

「あつ、ええと。……た、多分、かなり高位の武闘家だと思いやす

が……」

「武闘家？」

「素手で闘っていること何よりの証でさあ。それにあの動き、相当に訓練を積んでやす」

「ロイにはあのオジサンの動きが見えんのか？」

「……。あの攻撃は、恐らく足技だとしか……」

鍛え上げたはずのロイの目でも、わずかに描かれる軌跡を辿るのでやっとだった。

しかしその内容だけでも驚くには十分だ。

「なっ！？ あのオジサン、蹴りで魔物の頭を切ってるっていうのかよ！？」

「最高位の武闘神なら何も使わねえで、一撃で鋼鉄も砕けるとか……」

「己の肉体のみを武器とする、それが武闘家でさあ」

「……武闘家……」

セルグが再び男性に目をやると、そこには山と積まれた魔物の上に立つ影だけがあった。

「終わりましたよ」

背負う月明かりのように優しい笑みを浮かべて、男性は二人のもとにやってきた。

「お二人とも、お怪我はありませんか？」

「は、はい！ なあオジサン、オジサンは武闘家なのか！？」

「ええ、そうですよ。ですが、まずはお怪我がないようでしたら、町へ行きましょう。また新手が来るとも限りません」

興奮気味のセルグの言葉を男性は柔らかに、しかし確かに断ち切  
って、次の指示を出した。

「そ、そうですね。ではご同行していただだけやすか？ 町にはうち  
の隊商の頭、坊ちゃんの父君もいらっしやいやすんで」

「よろしいのですか？ ではご一緒させて下さい」

「オジサン、俺セルグってんだ！ オジサンの名前は？」

「ゴルディアス・シャーナと申します。ゴールドで構いませんよ」

「わかった！ それで……」

「坊ちゃん、まずは町へ行かないと。話はそれからでも出来ますか  
ら」

初めて目にした武闘家の闘いに、つい興奮したセルグだったが、  
今はこんな場所で語り合っている場合ではないことをようやく思い  
出した。

「あつ……。うん、そうだな。よし、じゃあ急ごうぜー！」

「坊ちゃん、一人じゃ駄目ですって！」

「坊ちゃんって呼ぶのやめたらやめてやる！」

「ああもつ……」

さつきまでの恐怖はどこかに飛んでいったらしく、セルグはすっ  
かり元気を取り戻していた。

そんなセルグのおかげで、ロイはまた心臓を縮こまらせる結果に  
なってしまった。

「うわっ！？」

「坊ちゃんー！」

「たたつ……。大丈夫、コケただけ」

「っだあー！！ 心配させねえで下せえよ、もつ……」

「セルグ君、まだ危ないんですから離れないで下さい。ロイさんも君に何かあつたらお父上に顔向け出来ないでしょう?」

「う……。はい」

「坊ちゃん、さあ」

差し出されたロイの右手。

セルグはこの手の暖かさを、一生忘れることはなかった。

「セルグ!! 無事だったんだな!!」

「親父っ!!」

町の入り口で一人立っていたブラッドに、セルグは駆け寄り、抱きつこうとした。しかし。

「馬鹿者おっ!! 何で馬から飛び降りるようなことをした!!」

ガンツ! と思いつき横つ面をぶん殴られる。走っていた反動もあり、セルグは思い切り尻餅をつく羽目になった。あまりにも唐突な出来事に、放心するしかない。

「え……?」

「お前はロイが心配だったんだろうが、その行動こそがロイを危険にさらすと何故考えない! 足手まといにしかならんだろうが!!」

「だ、旦那っ」

「お前は黙っている、ロイ。いいかセルグ。上に立つ者は、時には非情な判断とて必要になる。あの場では他の隊員を逃がすことが最優先だ。そのためにはロイに任せるしかないのだ。……わかるな?」

「……えよ」

放心状態だったセルグの瞳に、段々と強さが戻ってきた。

言われっ放しではられない。

「ん？」

「そんなのわかんねえよ！！」

「坊ちゃん」

ロイが止めに入るも、セルグはその手を振り払った。真っ直ぐにブラッドを見据え、心の内を叫ぶ。

「確かに俺は足手まといだった！　けどロイだって仲間だろ！？　なら何でロイだけ置いてくんだ！！　人間相手ならともかく、魔物だったんだぞ！？」

小さな体に煮えたぎるマグマの如く、セルグは怒りをぶちまけた。ただそこには、一筋の悲しみも含まれていた。

「オジサンが……ゴールドさんが来なきゃ、きっとロイは死んでた……」

「……」

「ロイは用心棒だ、確かに戦うことが仕事だよ……。けど、けどだからって……っ！」

「セルグ君、そこまでにしておいたほうがいい」

何とも言い難い難い空気の中、ゴルディアスがセルグを制止した。

「ゴールドさん」

「ん？　……失礼、あなたは？」

本当に激昂していたらしい。聡明なブラッドには珍しく、今になつてようやくゴルディアスの存在に気づいた。

「失礼、私はゴルディアス・シャーナ。先ほどあの場に居合わせたので、魔物退治をお手伝いさせていただきました」

「それは……。ありがとうございます、感謝の言葉もありません」

「いいえ。……セルグ君のことを心配しての物言いが、厳しくなるのは理解出来ます。馬から飛び降りると言うのは、確かに無鉄砲だ。ですがセルグ君はまだ幼い。大人の事情を理解するのは難しいですよ」

「ゴールドさん、俺ガキじゃねえ！」

優しくしてくれていた人物の思わぬ裏切りに、セルグは仰天しながら言った。

ブラッドはそんなセルグに、先ほどとは打って変わった静かな口調で言った。

「セルグ、俺の言うことがわかんねえなら、お前はまだガキだ。ゴールドさんも俺の言葉を否定なさってないだろう」

「けど、だって……」

「坊ちゃん、いいんですよ」

「ロイ？」

「俺の仕事は、命を賭けるのが仕事みてえなもんなんですよ。だから報酬も高いんで。……俺は、坊ちゃんたちに心配してもらえただけで十分さあ」

「……」

黙り込んだセルグを見かね、ブラッドがロイの言葉を継ぐ。

「俺たちだってロイは心配だった。割り切らなきゃいけないが、そう簡単に割り切れるもんじゃない。……だから、ほら」

ブラッドが指差した方に視線を向けると、建物の陰から誰かがこちらを見ていた。

「……隊の、みんな？」

「そつだ。つたく、明日に響くからさつさと寝ると言っておいたのに……」

ブラッドが一睨みすると、向こうから『やべえ、見つかった！』とか『こりゃ〜どやされるぞ』なんて聞こえてきた。

「馬鹿野郎っ、最初っからバレバレだ！      ああもう面倒だ、全員こっちに来い！！」

そう言うつや否や、周囲から隊員がゾロゾロと出てきた。どうやら一人残らず揃っているようだ。

「いいかセルグ、……これがお前の怒ったことへの返事だ。わかるな？」

「……ん」

「お父上は隊を守ることを優先する義務があります。その義務をこなせるからこそ、長でいられるのです。……わかりますね？」

「……はい」

セルグとて、父の義務を理解していないわけではない。

ただ、あの場で自分自身の義務、『安全を確保すること』を放棄したことを認めたくないだけだ。

「おお、今日の坊ちゃんは聞き分けがいいな」

「頭の愛の一撃が効いたんだろ」

「はっはっは、違えねえ！」

「ジャン、お前ら少し黙ってる！」  
「わっ、頭！ おつかねえなあ、もう」

隊員たちが笑っている。

自分たちを心配して、無事だったから、安心して笑っている。

（俺、馬鹿だ。親父やみんなだって辛かったにきまってんのに、あんなこと……！）

ギュツと手を握り締める。強く強く握り締めていないと、今にも涙がこぼれ落ちそうだった。

（それに俺、いま考えたら馬から飛び降りて、よく怪我しなかったよな）

改めて考えてみると、自分はなんて恐ろしいことをしたのだろう。あんな速さで走っていた馬から飛び降りて、無傷でいられたのは奇跡としか言いようがない。

（そっか……。だから親父、俺のこと殴ったんだ）

一歩間違えば死んでいた。だから親父は怒ったんだ。

（自分から死ににいくようなマネをしたから）

いつも言われていたことだった。親父は自ら命を絶つような真似を一番嫌う。今回はまさにそうじゃないか。

（……。力が、欲しい）

自分の望むものを、守る力が。望んだことを行える、強い力が。ただの子供は、守られるだけ。そんなのは嫌だ。もしゴールドさんのような力があれば、誰にも心配させないで、大切な人を守れる。

「ゴールドさん」

これが、俺とお師匠の出会い。

十年後。

セルグはゴルディアスの指導の下、一人前の武闘家になるために修行を続けていた。ジーパを離れ、アスケイル国内をずっと旅している。

あの時、その場で弟子入り志願したセルグを、ゴルディアスは快く引き受けてくれた。

もちろん唐突すぎる申し出に隊員は驚き、引き止めるものがほとんどだった。仮にもセルグは次代の頭領なのだ。

けれど父親のブラッドは賛成してくれた。後悔しないなら、それが己の道だと誓えるなら、進めと。ロイも苦笑しつつだが、賛成してくれた。『坊ちゃんが戻ってくるまで、現役で頑張ってみせませあ』と言って。

あの時の意思は、今は信念となってセルグの中にある。守るための力を手に入れる、大事なものを守り通すために闘う。それがセルグの目指す高み。

「セルグ、しばらくレドッグの町に泊まるつか」

「わかりました、お師匠」

そうして、セルグは運命の出会いを果たすのだ。

## 優しい歌を貴方にへ前編：ローザン

その時は、あまりにも唐突にやってきた。

「母様、母様！」

「なあにローザン。どうしたの、そんなに慌てて」

「父様は明日お戻りになるんでしょう？ やっぱ遅くなるのかしら」

「昼過ぎに帰ってくる予定よ？ 一体どうしたっていつの。今回の行程に、占いで悪い結果は出なかったでしょう」

「うーん……、そうよね。みんな問題ないって言ったものね。占いの出来ないあたしが気にすることじゃないか……」

「ローザン……？」

町から町へ、風とともに渡る流浪の民、ルマ。

ルマの一族は総じて霊力が高いことで有名で、他より霊力が高いシエルマスの民の中でも際立っている。また、就く職が独特なことでも有名だった。

霊力が高ければ、多くは五大職の吟遊詩人に就く。しかしルマでは楽器を奏でたり歌を吟じたりするのは、古来より男性の役目。この職に就くルマの女性は稀で、ほとんどが占い師か踊り子を選ぶ。そのため女性は幼い頃から、両方の修練を積むのが慣わしだった。

現在、族長であるベルンは、シエルマスのとある有力者に謁見するため、数人の供を連れて一族と行動を別にしていた。

その長女であるローザンは、今年で九歳。三年後には成人の儀を迎え、大人の仲間入りをする。そして同時に、次期族長として様々な洗礼の儀式も受ける。

通例では男子が族長となるが、長男であるユヒトは末子で、去年

生まれたばかりの赤ん坊。長子のローザンは女とはいえ、族長としての資質に何ら不足はない。そのため、次期族長の決定に誰も異を唱えなかった。

「目が覚めたら、なんか嫌な気分になっただけなの。変なこと言っ  
てごめんなさい。じゃあ」

「お待ちなさい」

「え？」

今は夫の代わりに一族を率いるローザンの母、ロザリアが口を開いた。

「確かにあなたは占いができないわ。けれど、事象をつかむことで、  
あなたに勝る者はいないでしょう」

「ま、まあ、そうだけど……」

占いは過去や未来、様々な事象を対象とするが、まずはその事象を『つかむ』ことから始まる。そのつかんだ事象を手繰り寄せること  
で、初めて『結果』を得るのだ。

ローザンは占いの第一段階、事象を『つかむ』能力は必ず抜けて  
いた。その能力は大人顔負けで、どんな曖昧な事象でも必ずつかん  
だ。

しかしローザンは、占いができない。それはつかんだ事象を、ど  
うしても手繰り寄せられないためだ。

例えるなら、誰も探し出せない細い糸は見つけられるのに、誰も  
が簡単に手繰り寄せる太縄でさえ、なぜか途中で手放してしまう。

そのため占いの根源的な動作、『結果を伝える』ということがで  
きないのだ。

「あなたは他人に結果を伝える力を持たないだけ。漠然としか浮か

ばないから、あなたも困るのだろうけど……。これは由々しき事態なのかもしれないわ」

「ゆ、ゆゆしきってどういうこと……？」

緊張を滲ませたロザリアの声に、ローザンは怯えを漏らした。

次期族長であると日頃から意識して、大人びた言動をとることも多いローザンだが、彼女とてまだ九歳。幼い子供なのだ。

「由々しき、とは何か問題があるかもしれないということよ。……

もう一度、占わせてみたほうがいいかもしれないわね」

「母様、本当？」

「ええ。あなたは私の娘、次代の長。私はあなたの言葉を信じるわ」

「ありがとうございます！」

こうしてロザリアの号令の下、一族でも優秀な占者たちが集められた。

「悪いわね、みんな。やり直しなんかさせてしまった」

「気にしないで、ロザリア様。ローザン様の『つかむ』力は私たちの上に行く」

「ええ、だからローザン様が言われたならば、やり直さなければ」

最も若い者は十二歳、最年長は七十を越える女たちは、通称『占者の輪』と呼ばれる。

彼女らは自分たちの面目を潰したローザンへの妬みはなく、まるで仲良し主婦のお茶会かと思うくらい底抜けに明るかった。

「……ローザン様、来ないんですか」

もそり、と静かに口を開いたのは若干十二歳でこの輪に加わるこ

とを許された占者、マオだ。

「あの子は踊りの稽古中よ」

「そうですね……」

神秘的、といつかどこか浮き世離れた雰囲気のマオは、いつも占いの世界に没頭していた。

そのマオを唯一『親友』と称したのは、後にも先にもローザンだけであった。

活発なローザンと物静かなマオは、どうみても対象的な存在だった。ローザンは族長の継嗣であり、将来は本職に踊り子を選ぶだろう。何せ占いが出来ない。

対してマオの父親はようとして知れない。母親はルマだが、一度はルマを離れた。だが、ある日突然、赤ん坊のマオを抱いて帰ってきたのだった。そうして父親のことを何も話さないまま、五年前に息を引き取った。それを境とするかのように、マオは類似希な占者としての才能を開花させ、今に至る。

「……稽古が終わったらローザンも来るわ。だから貴女も頑張ってください」

「……はい」

滅多に自ら口を開かないマオが、ローザンのことを尋ねる理由がロザリアには分かっていた。

一族はマオを受け入れたが、本当の意味で『受け入れた』のはローザンだけ。だからマオはローザンだけに心を開いた。誰よりも繊細な心と力を持つ少女だからこそ、敏感に感じ取って。

「族長に何かあったら大変なものね！ さあ、ちゃっちやと占いましょー」

取り分け明るい女性が声をかけ、占者一同が頷いた。

「ではどの術法でやるかえ？ 出立の時は星占いじゃったの」

「星は真実を告げてくれるけど、大きな流れだけだわ」

「なら風読みは？」

「気まぐれ過ぎる。族長の『今』を知るなら最適だけど」

「じゃあ……」

占いの方法は、それこそ星の数ほど存在する。術法と呼ばれるそれは、一つ一つ、占う事象に最適なものを選ぶ必要がある。

「……火占いが、いい」

ポソリと、下手をしたら聞き逃してしまいそうなくらい小さな声で、マオが呟いた。

「火占い!？」

「だけど、あれは……!」

ざわざわと占者たちに動揺が広がる。

火占いは術法の中で、その正確さと比例して、最も困難で危険な方法なのだ。

「マオ、なぜ火占いがいいと思うの?」

場の動揺を鎮めるため、ロザリアが言葉を発した。

マオは周囲の反応を気にすることなく、淡々と考えを告げる。

「火占いは、ローザンと相性がいい。ローザンは風に愛されてるか

ら。それにローザンが拾った事象は、今回もローザンが拾ったほうがいい」

抽象的なことしか言わないマオだったが、この場にいる占者たちは一流の者ばかり。すぐにその意味が理解出来た。

「そうね、ローザン様は風使いの素質も高いし」

「火占いは風の力があると、正確さが増すものね。風読みよりいいわ」

「それに事象を掴むのはローザン様の得手ですもの。誰かお手伝いすれば確実よ」

火占いが一流の占者さえ戸惑わせる、最大の理由。それは事象を掴む時、占者に危害が及ぶ可能性があることだ。

だが、事象を的確に、かつ素早く掴めば、火占いは最高の術法だ。

「しかし火の中に手を入れるのじゃ、流石のローザン様も拒まれるやもしれん」

「……ローザンは、やる」

普段は人に反した意見など言わないマオが、珍しく強い語気で反駁した。

「ローザンは風の子。風の力で、火を従える」

大人たちは例外なく、マオの言葉に瞠目した。

ルマは流浪の民　風の民とも呼ばれる一族だ。

定住しない彼らは、古来より謂れなき迫害を受けてきた。しかし風のような気ままさと、それでいて誇り高い彼らは、一処に留まるのを許さなかった。

しかし、今は違う。国家という力が完全となった今、昔のような流浪は許されなくなったのだ。

シエルマス国内を巡ることは許可されたが、それはルマを想つての法ではない。余計な軍事を割きたくなかったことと、ルマを利用する思惑があったからにすぎない。

そんな思惑から出来た穴だらけの法は、長が行く先々で有力者に頭を下げ、許しを乞わなければならぬという、屈辱的な状況を作り出した。

「風の子……。そうじゃな、ローザン様は風の神に御加護を受けて生まれた子。余計な心配はいらんの」

ローザンが生まれたその瞬間。ルマの風使いは一人残らず、無風だったのに『風が吹いた』と勘違いしたという。

また、ルマの隠語では自由気ままに吹く『風』はルマを指し、力はあるてもその場から動けかない『火』は定住民を指す。

マオはその隠語を意図したわけではないが、大人たちを黙らせる結果となった。

つかの間の　夢を見させたのだ。

「……。そうね。みな、火占いへの意見は？」

ロザリアの言葉に、女たちは一様に首を横に振った。全員が賛成、ということだ。

「では、火占いの用意を。規模はどうしましょうか？」

蠟燭の火から巨大な焚火まで、火占いはその規模も悩みの種だった。

いくらローザンと相性がいいとはいえ、ローザンは占いが『出来

ない』のだから。

「山組がいいじゃろう」

先ほどまで火占いに賛同していなかった最年長の占者、ソキヤが言った。真正正銘、風だったルマを生きた、最後の『ルマ』だ。

そのソキヤが言った山組とは、ルマが扱う火占いで、最も大きな規模を指す。

「ソキヤ、山組で大丈夫かしら？」

「ローザン様だけなら危険じゃろう。ワシらも力を貸しましょうぞ」

「私も……やる」

「マオ」

他の女たちは言葉に出さないものの、笑顔でロザリアを見つめていた。

（仕方ないわ）

本当は娘を危険にさらしたくない。だけど、これが上に立つ者の務め。

「では、山組の準備を！」

ロザリアの号令に、全ての占者が頷いた。

しばらくの後、踊りの稽古を終えたローザンが母のいる天幕に向かうと、そこは慌ただしい雰囲気にもまれていた。

どうやら占者の輪は終わってしまったらしい。これではマオには会えない。

(マオったら、すぐどこかに行っちゃうんだもの)

しかし、それは珍しく杞憂に終わった。マオが残って母と話していたのだ。

「マオ、母様！ 占いはどうなったの？」

ローザンが二人に駆け寄ると、そこには思いがけないものが用意されていた。

(これ、火占いの……！)

火占いに必要な占具、慌ただしかった天幕の外、そして話し合っていた二人。

「……火占い、やるのね。あたしもやっていいんでしょ？」

「そう。ローザンが中心」

「わかったわ」

火占いなら、自分も力になれる。マオたちが力を貸してくれるなら、怖いものはない。

「今夜行っわ。心の準備をしっかりとね。……例え良くない結果が示されても」

「……。わかってるわ、大丈夫よ母様。あたしだってルマの女よ」

未来に怯えたら、占いなど出来ないのだ。

恐怖をなくすために未来を知るのではない。知ってしまったえば、それこそ最大の恐怖だ。知るのはただ、少しでも立ち向かう力を得るため。

夕方になり、野営地の真ん中に焚火が用意された。腕どころか一人は容易く飲み込む大きさ。これが山組だ。  
一歩間違えば、占者の命をも奪う。

「よし、いくわよ！」

だというのに、命を危険に晒すローザンには、恐れをなした様子がない。

それは過信でも慢心でもない。また、確信からでもない。『何をすべきなのか』が、分かっているからだった。

ローザンは幼いながらも確実に、淡々と占いの手順を踏んでいく。仲間に不安を与えないよう、明るく振る舞う健気な娘の姿を見て、ロザリアは自分のほうが恐れをなしていたことに気がついた。

(神よ、風の神よ。……どうか、護りたまえ)

幼き娘を。一族のために膝を屈することを余儀なくされた長夫を。

やがて日が沈みかけ、火占いが本格的に開始された。禍々しいくらいに赤く染まった夕陽を背にして、ローザンが山組の前に立った。その周りを占者の輪の女たちが、ぐるりと囲む。

「来れ火の神よ。巡れ風の神よ。声を届けたまえ、辿る未来を見せたまえ！」

ローザンの呪文を占者たちが繰り返し、力を何倍にも膨れ上がらせる。

風が喚ばれ、火をさらに大きくしようとする天高く巻き上げていく。

「来れ火の神よ」

再度の呪文詠唱。これを終えたとき、ローザンは火に、いや炎にその身を投げ出すのだ。  
だが、その時。

「ローザン！！」

天高く舞い上がっていた灼熱の炎が、喚ばれた風に逆らって、中心の術者のローザンを飲み込んだ。

自分の名を叫んだ誰かの声を最後に、ローザンの意識はそこで途切れた。

## 優しい歌を貴方に〈後編〉

よんでる。

だけれが、かなしいこえで。はやく、こたえなきや。

揺らめく意識の中、ローザンは誰かの声を聞いた。

大事な人の声だ。ああ、泣いている。喪失に怯えて泣いている。お願い、泣かないで。

(いま、こたえるから)

重い目蓋をゆっくりと開けると、そこには泣き崩れるマオの顔があった。

さっき夢つつつに聞いた泣き声は、マオだったのだろうか。

「……マオ。泣かない、で……」

「ローザン！」

どうやら自分は、火占いの最中に倒れたらしい。今、マオに膝枕をしてもらっている状態だ。

だけど身体に全く力が入らないなんて、こんな代償は初めてだ。

「良かった、気がついて……。このままだったらどうしようかと……」

「心配かけてごめんなさい。マオ、母様は？」

「それが……」

「？」

目をそらしたマオを不思議に思ったが、そういえば 何か変だ。  
ローザンは何とか身体を起こすと、ゆっくりと辺りを見回した。

「な、何よここ……」

まるで夕焼けの世界だ。

全てが真っ赤な場所だった。空も大地も いや、その境すら見  
当たらない。ただ、赤だけが広がっていた。

呆然とするローザンに、マオがぼそぼそと事態を説明してくれた。  
到底、信じられるものではなかったが。

「あの、ね。ローザン、火に飲み込まれたのは覚えてる？」

「え、ええ。そこまではしっかりと……」

「私、咄嗟にローザンの手を掴んだ。そしたら、私も火に飲み込ま  
れて……」

火占いは失敗だった。呪文詠唱が終わる前に、中心の術者が火に  
飲み込まれたのだから。

ただ、マオはローザンが炎に消えていく姿を見ているだけなんて  
出来なかった。たった一人の、何よりも大事な友達なのだ！

だから手を掴んだ。そうして一緒に火に飲み込まれ、目を瞑った  
。

「だけど、熱さを感じたのは一瞬だった。驚いて目を開けたら、も  
うここにいて……」

占いが失敗した場合、術者は様々な代償を払わなければならない。  
それが未来を知ろうとした、分不相応なことをしたツケだ。

しかし大抵は多めに霊力を削がれるだけで、火占いのように身に  
危険が及ぶものは少ない。

かといって、火占いでも術者をどこかに飛ばすなんて聞いたことがない。おまけに手を繋いでいた者まで一緒に飛ばすなんて。

「そんな……。どうしましょう、帰れるのかしら」

「……分からない」

見たことも聞いたこともない赤い世界で、無力な子供が二人。怯えるなというほうが無理だった。

それでも、まだ心は失っていない。二人なら、立ち向かえる。

「マオ、占具は持つてる？」

「うん。札なら……」

「じゃあ、占いましょ。私とあなたなら、必ず答えが出せるわ。ここが何処なのか、どうやったら帰れるのか」

「ローザン」

「風は凪いでも、いつかはまた吹くわ。でしょう？」

「うん……」

マオは懐から一組の札を取り出すと、赤い地面に置いた。擦りきれて手垢が滲んだ札は、一目で使い込んだことが分かる。

母の、形見だった。

「マオは札占いが一番得意なものね。ふふ、頑張りましょ」

「うん。ローザン、さあ札をきって」

「任せて……」

ローザンとて占者の修行は積んでいる。札をきる手に迷いはない。札の山を二つに分け、それを両手で円を描くように三回、かき混ぜる。

そしてまた一つに纏め、同じことを三度繰り返す。終わったら山

から札を取り、右回りに一枚ずつ伏せていく。

(待っててね、父様、母様、みんな。必ず帰るから)

私には待ってる人がいる。絶対に帰らなきゃいけないのよ！  
そう心の中で叫んだローザンは、最後の　十三枚目の札を円の  
中心に伏せた。

「さあ、札よ。導いて。示して。私たちが進むべき道を」

そう言つとマオは、北と南の場所にある札を表にした。  
場を作るまでがローザンの役目。ここからはマオの領分だ。  
位置や向き、組み合わせ。それらが一つでも違えば、全く別の意  
味になる。それが札占いだ。いくつもの意味を持つ札を、ゆっくり  
と、読み解いていく。

「大いなる力。門、扉」

示された絵札の内容。そこに表されたものを読み取りつつ、新た  
に東と西の場所の札をめくる。

「進展、前進。……後退、後戻り」

(……?)

全く逆の意味を持つ札が出たことに違和感を覚えつつも、次の札、  
北と東の間にある札を返した。

「神、精霊。大地」

何かが、おかしい。

「声、歌。漆黒、夜」

だが占いを途中で止めれば、占者に何らかの影響が出てしまう。だから違和感は拭えないが、このまま続けるべきだ。

そう考え、マオは再び札に意識を集中させた。

南と西の間の札。続いて北と西の間の札を表にする。

「赤、夕焼け。月、黄金」

さらに、輪の残り二枚をめくった。

「子供。愛、友情」

そして、最後の中心の札を。

「絶望、死……」

間違いなく、今は最も見たくない札だった。

禍つ事を示すこの札。

「死の札……。けどマオ、他の札の解釈が分からないわ」

死の札は禍つ事を示す札。けれど組み合わせ次第では、乗り切るべき困難などを示す場合もある。ただ忌むような札ではない。

「こんなの、私も初めて。だけど……」

いつもは札が答えを教えてくれるかのように、いとも簡単に読み

解くことが出来る。なのに今回は、複雑な暗号でも示された気分だ。ただど一つだけ。この答えだけは、すぐに分かった。

「幼い誰かが、友を失う……」

マオが告げた解釈にローザンは絶句した。

幼い誰かが、友を失う？

（嫌よ、そんなの！）

「マオ、他の札は!?!」

「落ちて着いて、ローザン。……札はただ、大いなる力とだけ……」

マオは死の札の上に手を置き、小さく息を吐いた。

「もう一度……」

まだ札は動かしていない。示された答えを、読み解かなければ。途端に、辺りの空気が変わった。マオがありつただけの霊力を札に込めているのだ。全神経を集中させるため、瞳が空ろになる。まるで別の世界を見ているかの如く。

ローザンは唇を噛みしめた。この先は何の力にもなれない。マオに全ては託された。

唐突に、マオの瞳に力が戻った。

「ローザン、これは一つずつ読み解くの!」

「え?」

「死の札が中心で、大いなる力……神の札が最初。そして、始まりと終わりの札。これらは『段階』を示してる」

「成る程。どつりで謎かけみたいなの並びなわけだ」

「一緒に読み解こう。まず最初は神の札と、扉の札」

「この場合は神と言うより、大いなる力のほうが良さそうね。入り口を示す位置だもの。扉は……、出口だし、そのまま？」

「うん。そうなるよ……」

そこでローザンは閃いた。

「大いなる力。あの扉よ、マオ」

「前に長老が言ってた『界王の扉』ね。それが始めの場所にあるなら、この札は……」

見えた。

「『界王の扉から来た者が、幼子の友の命を奪い、月夜の大地を赤く染める。その大地より大いなる力を与えられるも、神の……界王の力により、帰りは死の扉へと。愛情を知らぬ孤独と絶望の歌によって』」

「え？ マオ、それは私たちの帰り道に関係はないんじゃない……」

ふるふる、と小さく頭を横に振った。そして、マオは札を通常の逆から一つずつ示し始めた。

「『絶望の淵より帰す幼子。真紅の大地を黄金の力をもって、漆黒の時へと。愛に満ち溢れた喜びの歌で入り口は開かれる』」

「逆さ読み……！ そうか、私が札を切ったから。向かいにいるマオが求めた答えを導くためには、逆さから読む必要があったのね！」

今になってみれば、どうして最初からそうしなかったのだろうかと思うほどだ。逆さ読みはそんなに珍しい手法というわけでもないし、むしろこんな場合なら、やって当然だ。

やはり当代随一の占者とはいえ、二人はまだ子供。焦りが勝って本来の力を発揮できずにいたのだ。

「ローザン、ここは……この札で示された子の心の中、ってことみたい」

「心の中、ね。どうやら界王の血族みたいだし、そんな凄いこともありなのかもね」

「今の私たち、精神体なんだと思う。本当はきつと、眠ったまま。……この子は誰かを呼んだ。孤独と絶望が深すぎて、赤が怖くて、一人じゃいらなくて」

「その『呼び声』が火占いの時と重なっちゃったのね。術中は何かと不安定だし、繋がっちゃったのかしら」

「きつとそう。さあ、ローザン。答えも出せだし、帰ろう」

「ええ。『愛に満ち溢れた喜びの歌』だったわよね」

「うん。ローザンは何がいいと思う？」

歌。霊力を用いる術者として有名な、吟遊詩人たちが吟じるもの。願いを、力を、夢を、希望を、愛を。すべてを託し、籠めるもの。

「そうねえ……。ララ、かな」

「ルマの子守唄を？」

「だってララは、子供が生まれてきてくれたことを喜び、愛しむ歌よ。聞き手も子供なんでしょ？ だったら、ララがいいわよ」

「……うん。そうだね。ララがいい。想いは、きつと届く」

「じゃあ歌いませよ、マオ。私たち一族の子守唄。風にのって、喜びをみんなにも伝える歌を」

ローザンを皮切りに、二人の歌声が赤の世界に満ち溢れた。

優しい、それは優しい歌だった。

旋律も歌詞も、全ての愛と思いやりを音と言葉にしたような、そ

んな優しい歌だった。

『 生まれた吾子。可愛い子』

『 ありがとう。生まれてきてくれたことに、お礼を言いましょ』  
『 愛に満ち溢れて生まれた吾子。これからもあなたを愛で満たしましょ』

『 ララ、ララ。風にのって歌が広がる。この歌声はあなたの笑顔のために』

二番を歌おうかな。そう考えたローザンは、なぜか急に瞼が重くなってきた。

そうして薄れ行く意識の中で 何故か、真っ赤な月を見た。

「ローザン！」

重い目蓋を開けると、涙に濡れた母の顔があった。

「良かった、目を覚まさなかったらどうしようかと……！」  
「母様」

ローザンは体を起こそうとしたが、体が重く、起き上がることが出来なかった。それでも何とか視線だけを動かして周りを見れば、どうやら自宅の天幕に寝かされているらしい。

( 『 帰って』 これたんだ…… )

だけど 自分たちを呼んだ子は、どうなったのだろう。

神に等しき界王、その血族。それなのに友達を失った、と札占いに出たあの子。

一体、何があったのだろうか。

「母様、マオは……」

「ロザリア様、マオが目を覚ましました！」

ちようどいい具合に、天幕にマオの世話していた女性が駆け込んできた。

「良かった、ローザンも今、目を覚ましたところなのよ」

「ああ、本当に良かった！ 私、みんなに伝えて来ますわ」

「ええ、よろしくね」

パタパタと駆けていく女性を見送ると、ロザリアがローザンの頬を撫でた。

優しい、母の温もり。

「こんな事態は初めてで……。あなた方が炎に飲み込まれたときは、心臓が止まるかと……」

「……母様」

「……あの後、輪に加わっていた占者たちが……。火占いを終わらせたわ」

微かに揺れる母の声に、良くない結果だ出たのだと悟った。

「……長は、……」

ああ、そのさきをいわないで。かあさま。

「……あの人は、亡くなったと……！」

ボロボロと零れる母の涙は、ローザンの頬をつたい、枕に染みを

つくっていく。

(そっか。あの、嫌な予感……)

死をもたらす風が、緩やかに私の頬を撫でたのだ。父の命をもらいうける、と。

悲しみ、絶望したローザンに、再び強い脱力感が襲ってきた。ローザンはそれに逆らわず、絶望とともに深い眠りへと落ちていった。

「母様、風使いで四位に昇級出来たわ！」

「まあ。おめでとう、ローザン」

長を失うという突然の事態から、はや十年。

ルマはそれなりに平穩を享受していた。

「今夜は秘蔵の酒で一杯やりましょうか。明日には町に着くものね」「やった！」

現在は亡き夫の後を継ぎ、当時まだ幼かったローザンの代わりに、ロザリアが中継ぎとして長を務めている。しかし、来年の夏、その座はローザンへと譲られる。

「ベカザの町も久しぶりねー。去年は来なかったし」

「一年もあれば、随分と様変わりするわ。それが旅の楽しみでもあるのだけねど」

「そうよね」

あの日、長ベルンは亡くなった。

群れるはずのない性質である魔物の大群に襲われ、酷い最後を迎えたのだ。

ただ、運が良いのか悪いのか、それは謁見中の出来事だった。ベルンや同行した男たちは、一族でも特に有能な風使いや吟遊詩人だった。彼らだけならば、簡単に逃げられただろう。

しかし、眼前の領主を見捨てるわけにはいかなかった。自分たちが魔物をけしかけたと判断されるかもしれないし、見捨てて逃げれば今後の関係に支障をきたす。それだけは避けなくてはならなかった。

そうしてベルンは命を落とした。領主を庇って魔物の爪に引き裂かれ、牙に貫かれ、食い千切られて。

ベルンの血肉を浴びた領主は逃げ延びた後、しばらく茫然と立ち尽くしていたという。何を思ったのかは知る由もないが、ベルンに命の恩を感じたらしい。自分の領内を流浪するときは許可を申請する必要はない、と生き残ったルマに、その場で申し渡したのだった。ルマ六名のうち、ベルンを含め、襲撃時の死者は三名。手や足を喰われるなどの重傷者二名。彼らは数日後、一族に戻ることもなくなつた。そして片目を失った『軽傷者』、一名。ルマ唯一の生存者となつた彼が、一族に事件の全容を伝えることとなる。

領主の配下の被害はこの数倍で、惨憺たるものだった。そのため領主がベルンに恩義をどれだけ感じていようと、通行許可以上の見返りは不可能だった。税を納めていないルマに報奨を与えれば、領民の不満が爆発してしまう。

よって、これが領主の精一杯の恩返しなのである。ただ、ルマの一族は仲間や長を亡くしたことは嘆き悲しんだが、この見返りに関してはさして不満を漏らさなかった。

彼らには『自由』こそが真理であり、最大の宝だからだ。

その後もこの領主は、周辺の領主たちに申請撤廃の働きかけを続けてくれている。そんな事情もあって、ルマで彼を恨んでいる人物はいなかった。

「ねえ母様、マオのとこ行ってくるわ。町に着いたらお互いに忙しいし」

「ええ、いってらっしゃい」

ローザンは組合から帰ってきたばかりだというのに、家で寛ぐこともせずに天幕を飛び出した。

「マオ、ただいま！」

「ローザン、おかえり。試験、受かったね。おめでとう」

「あら、占ってくれてたの？」

「ううん。ローザンが嬉しそうだから、受かったんだろっな、って」

「あはっ、あたしが分かりやすいのね。ま、隠すことでもないしね」

「うん。喜んでるローザンは、みんなを元気にさせるから、いいと思う」

「ふふ、ありがとう」

あの不可思議な出来事を経て、マオは占者としての力を一層強くしていた。自分の精神面がさらけ出された、という点が何か影響したのかもしれない。

しかし面倒ごとを嫌ってか、マオは一人前の位以上は昇級試験を受けなかった。

（あれから、十年）

大きな変化はなかった。けれど、これから起こる。

（ローザン、ごめん。一つだけ、嘘ついた）

ローザンが組合に赴いている間に、マオは占いをした。試験の合

否も気になったが、そのくらいは正確に結果をつかんでしまつから、知ってしまうとつまらない。

それに今回の試験は、不安がなかった。だから占った。今後の展望、ローザンの行く末。

(赤い月が訪れる。十年前の、あの子。春の太陽と、夏の太陽が隣に)

父の残酷な訃報を受けて、幼いローザンは前後の記憶を部分的に欠落してしまっていた。覚えているのは火占いをやったことと、父が亡くなったことのみだ。

あの不思議な赤い体験は、いまはマオのみが知る。

(来るよ、ローザン。あなたの、運命の歯車を回す人たちが。あなたを、ルマという籠から連れ出す人たちが)

もう長には伝えてある。ローザンは飛び立つ。世界という広い世界で風になる、と。

「……ねえ、ローザン」

「ん？ なに、マオ」

「……。ううん、何でもない。ベガザの町、楽しみだね」

「どうしたの、マオったら。珍しいわね。けど、確かに楽しみよね。

あの町、大きいし」

「うん。凄い、楽しみ」

いつか、帰ってきてね。

(これ以上はローザンのこと、占わないよ。未来に希望を託すために)

そして綺麗な満月の宴に、  
彼らはやって来る。

## 主のご加護を：ニーナ

いつも見てきた祖父の大きな背中。

地域の人々の尊敬と親愛を一身に集めてきたその姿に、幼い私は神を見た。

「ニーナ、今日のお勉強はもう終わったのかい」

「うん！ ちゃんとがんばったよ、おじいちゃん！」

「そうかい、ニーナは偉い子だな」

祖父のリーは今年で六十。チルト派の僧正として、このライナの町に赴任している。

メリコでも有数の規模を誇るライナだが、その分、心の救いを求める人は多いのだろう。祖父はいつも忙しく身を粉にして職務に励んでいた。

そんな祖父が私は大好きだった。

家族は全員がチルト派の僧侶だが、父は修行のために去年から遠く南ドーニヤに移り、母もそちらに暮らしている。

二人は来年、私の六歳の誕生日に戻って来る。その日を心待ちにしながら、私は祖父と二人で暮らしていた。

「あのね、ニーナ、お昼ごはん持ってきたよ。いっしょに食べよ！」

「そうかい、ありがとう。じゃあ教会の庭で食べような」

たった一人の孫である私を、祖父はとても可愛がってくれた。

そんな暮らしを送る私にとって、チルト派の僧侶を目指すのは当然の流れだった。祖父も幼子に分かるよう、堅苦しくならないよう

に気をつけながら、教義をお伽噺のように教えてくれた。

そんな、ある日。

「ニーナ、いい子でお留守番をしているんだよ。明日の昼には帰るからね」

教会の都合で一泊の出張が決まった祖父だったが、それも慣れたこと。何日も家を離れることもあり、そうした時はいつも隣のジエミおばさんが面倒を見てくれていた。

「うん、だいじょうぶだよ。おじいちゃん、行ってらっしゃい」

「ああ。じゃあ行ってくるな」

祖父を見送った私は昼食を早々に済ませ、ジエミおばさんが夕食を用意してくれるまで、勉強と偽って部屋に入り、こっそりと窓から庭に出て近くの野原へ遊びに行った。

そこは小さいけれど綺麗な花畑なのだが、何故か町の大人たちは近づかないし、その理由も言おうとしない。

ただ、火事があった痕跡があり、きっとその事が関係しているのだとは予想がついた。倒れた木々は焼け焦げ朽ち果て、新たな命の苗床となっている。

(今日はお花をつんでかえろう。ジエミおばさんにもあげるんだ)

今は夏、青いユクの花が綺麗な季節だ。林を抜け、子供には少し登るのが辛い程度の崖をよじ登り、目的の場所へと到着した。

大人たちが嫌うため、この場所にはあまり人が来ない。町から来るには道程が面倒なこともあるのだろう。

( だれだろう?)

花畑の真ん中に佇む、一人の男性。後ろ姿しか見えなかったが、何か彼に近づくことを躊躇させた。

それは雰囲気というべきか、はたまた空気というのだろうか。とにかく、いつもの遊び場である花畑が、まるで彼のために用意された場所に思えたのだ。

畏怖か、恐怖か。

初めて覚えた名も知らぬ感情に、私は思わず後退りしてしまった。

(あっ！)

ポキツ、と小気味のいい音が足元から響く。

「おや、町の子かな」

踏んで折ってしまった枝の音に反応して、男性は真っ直ぐにこちらを向いた。

男性はフードを目深に被り、顔はよく見えなかった。声は低くてとても綺麗だったけれど、温かみなど全く感じられない。

「あ、あ、あの……」

「ここに来る子供がいたとは驚きだ。君、親に何も言われなかったのかい？」

一言、声を聞く度に。一声、言葉をかけられる度に。身体中の細胞が叫び出す。彼にひれ伏せ、と。

一歩ずつ。ゆっくりと近づいてくる男性が恐ろしくて、体が震えるのを止められなかった。

「答えられない、か。まあいい。ここには二度と立ち入るな。」

チルト派の僧侶を目指すのだろうか？」

「！ な、なんで……」

「身なりを見れば分かる。首から下げてる輪十字の飾り、額の布。どちらもチルト派のものだし、ここから一番近いライナの町はチルト派の支部がある」

「……っ」

「子供、分かったのならば去れ。そして二度と来るな。さもなければ、後悔することになるぞ」

男性の口調はどんどん厳しくなっていく。

言われたことは理解出来ていたが、強く脈打つ心臓が邪魔をして口を開くことが出来なかった。

「子供、もう一度だけ言う。ここを速やかに去り」

「ニーナです」

「？」

「子供、じゃないです。わたしは、ニーナです」

何でそんなことが口をついて出たのか。

きつと自分でも、一生わかるまい。恐怖のあまり頭がおかしくなっていたのか、それとも。

「ほう、面白い。いいだろう。お前の名前を呼んでやる。……」

「ニーナ」

「……」

心臓が驚掴みされたかのように、わけの分からない、けれど激しい痛みが胸を襲った。

「名は存在の証だ。『子供』という呼び名で呼ばれていれば、お前

は特定されなかった。……だが、まあいいだろう」

男性が空を手で撫ぜるような素振りを見せると、急速に胸の痛みは治まっていった。

ゼエゼエと激しく呼吸を繰り返す私を見下ろしながら、男性は笑った。かすかに覗いた、とても美しいその顔で。

「殺そうと思ったが、生かしておいてやる。面白い僧侶になりそうだし、試験終了まで時間もないからな。だがニーナ、二度とここに立ち入るな。次はない」

そういうと男性は、右手を私の頭にかざし、何らかの術を発動させた。

「あ、ああ……っ！」

「お前とはもう一度会いそうな気がするよ。あの子供にもどことなく似ている。……だが、覚えていれば面倒があるかもしれないしな」

「や、いや、こわい、おじいちゃん、おじいちゃー！」

「忘れれば恐怖も忘れる」

パン！ と光が破裂して、私はそこで意識を失った。

「……ここは私だけの場所だ。もう一度燃やして浄化するのは面倒だからな」

その言葉は、私の意識に留まることはなかった。

「ちゃん、ニーナちゃん」

はっ、として飛び起きた。あの野原にいたはずなのに、いつの間にか私は自宅の寝室で眠っていたのだ。

「ごめんねえ、遅くなって。待ちくたびれちゃったんだね。夕ごはん持ってきたよ」

「ジエミおばさん……」

「さ、下においで。用意しておくからね」

まるで夢のような一連の出来事に、私はただ呆然とするしかなかった。空はもう紅くなって、夕陽も沈みかけている。

あの男性は確かに私に術を使ったはずだ。恐らく、記憶を奪う術を。しかし、あんなに恐怖した割には、記憶はほとんど失われていなかった。

ただ男性の容姿や、あんなに恐怖した声についてはどんなに思い出そうとしても、欠片も思い出せなかった。

(しっばい……したのかな)

それとも、そもそも自分についての記憶だけを奪う術だったのだろうか。

キュ、と布団を握り締め、強く目をつぶる。

どちらでも関係ない。あの野原にはもう行ってはいけない、それだけだ。

(みんながあそこをいやがってたわけは、あの人だ。あの人がいるから)

ジェミおばさんが待つてる。早く下に行かなければ。  
そう思って寝台から足をおろした、その瞬間。

「！！！！」

体を突き抜けた、『死』の恐怖。

思わず足を引き寄せて体に密着させたが、体はガタガタと震えだし、ついには涙が零れだした。

(おじいちゃん、おじいちゃん！！)

わかってる。祖父は来ない。今頃は目的地に着いているだろう。だけど、だけど。

たすけて。そばにいて。こわいよ、ひとりにしないで！！

「おじいちゃああん！！」

「ニーナ！！」

「！？ おじいちゃっ……！！」

これも夢かと思ったが、自分を抱きしめてくれたその暖かさに、祖父が本物だと確信することが出来た。

「おじいちゃ、おじいちゃ……！！」

「よしよし、怖かっただろう。もう大丈夫だ。わしがいるからな。もう大丈夫だぞ、ニーナ」

泣きじゃくる私を抱きしめ、祖父は優しく語りかけるように言った。

「これもチーリス様のお導きだ。急に予定が変更になったんだよ」

「おじいちゃん……」

「何があつたかは分からないが、もう大丈夫だ」  
「……うん」

ああ、我が主よ。偉大なるチーリスよ。

体を突き抜けた『死』の恐怖。だけど、あれは叫びにも思えたのです。私と同じく、『ひとりにならないで』という。

なぜか、私はそう感じたのです。けれど、私はそれを誰にも言えません。あの野原での出来事も。

どうか、あの悲しく壮絶な叫びを発した方に、主のご加護がありますように。

そうして記憶と恐怖は、時とともに薄れていく。

「ニーナ、忘れ物はない？」

「うん、大丈夫だよ。お母さん」

あれから五年。十才になった私は、正式にチルト派の僧侶となるため、家を離れて他の町にある僧房に入ることになった。

「さ、もう出発の時間よ」

「うん。行ってきます！」

「頑張るのよ、応援してるわ」

そうして着いた町は、薬草市が有名な町だ。

運命の出会いまで、あと五年。

## 愛しの町：リユーン

十二の時、流行り病で両親を亡くした。

精霊使いなのに武闘家並みに筋骨隆々として逞しかった父。その父が、最後は枯れ木のような姿で朽ちていった。

その死に様が、目蓋に焼き付いて離れない。

「リユーン、準備は出来た？」

「はい、姉さん」

それから四年。私は十五歳になり、精霊使いの位も順調に上げていた。

三つ違いの姉は二人きりとなった時、誰かを頼ることを良しとしなかった。既に精霊使いとして一人前の位を得ていたこともあり、二人で暮らすことを選んだ。

しかし精霊使いの職は、収入を得にくい。町や国と契約して働かなければ、最高位でも無収入だ。

姉は生来得意としていた魂読みの術で他者の気の色を読み、それを見せ物として生活費を工面してくれた。そんな優しい姉は生まれつき目が見えない。しかし、それを補うかのように強い霊力を備えている。

そもそも両親は代々シエルマスに暮らしてきた家系であり、その血を引く自分たちは、生まれつき霊力が高い。その力を活かし、家族は精霊使いの職を選んだ。精霊王の御力が最も強い、この町で。

シエルマスの根幹とも言える力、霊力。その力を精霊族と契約することで、この地に幸福と安寧をもたらす役割を担う。そのため組合員は少ない弱小の職だが、全員が職に誇りを抱いていた。

「昇級試験、頑張つてね。お祝いの用意をしておくから」  
「やだなあ、緊張しますよ姉さん」

この試験に受ければ七位。まだまだ下位だが、この位から町で公職に就くことが出来る。例え下つ端でも姉の負担を軽減できる事が嬉しくて、まだ試験すら始まっていないのに心が軽かった。

(ああ、楽しみですねえ)

不自由な目をものともせず、十五の時から働いてきた姉。その後姿を見送りながら、何の力にもなれない無力な自分が口惜しくて堪らなかつた。

どれほどこの時を待ち望んだことか。

両親を亡くした年から、私は三年間の修行に入った。天才と言われた姉に少しでも追いつくために、仲間内では荒行とまで言われている方法をとつたのだ。

その暮らしは荒行の名に相応しく、過酷なものだった。靈力を最大限に引き出すため、常にわざと制限して生活した。

それまで術で靈力を用いる時、私は術者の間で『道』と呼ばれる、初歩の段階を踏む必要がなかつた。道を探さずとも、自然と靈力が身体に満ちていたからだ。

しかし負荷をかけると靈力は身体の奥深くに潜つたかのようにになり、使う時に非常に苦勞するようになった。そのため無駄に靈力を消費すれば、すぐに尽きてしまう。奥底に眠る力を引き出すのは、並大抵の努力ではない。

そうやって術の根幹である靈力の扱いを基礎の基礎から身体に叩き込み、一切の無駄をせず靈力を用いるようにしたのだ。

学問の分野は記憶力が抜群だったこともあって、さして苦勞はしなかつた。それでも毎日何時間も書物を読んで課題を師匠に提出す

る、というのには正直辟易したが。

肝心の精霊族との契約は、最初の交渉の仲介役は師匠に手伝ってもらえたが、以降は自分自身を精霊族に認めてもらうしか方法はなく、相性や運が大きく左右する。

既に両親や姉が契約済みだったため、私は信頼を得やすく、簡単に契約を結べた。最初に呼び掛けに応じてくれた水の精霊族と相性が良かったのも幸いした。

人族がいくつもの民族に分かれるように、精霊族には固有の分類がある。

光、闇、水、炎、風、土、鋼、緑。属性と呼ばれるその分類ごとに、彼らは得意とする術が異なる。

また光の精霊族は闇の精霊族と仲が悪い、といったように八つの属性は陰陽に二分され、反対側の属性と契約するのは多大な労力を要する。

七位に合格するためには二属性以上と契約していなければならぬが、既に五位相当の四属性と契約を終えていた。そのため、合否に一抔の不安も抱いていなかった。

試験は朝から昼にかけて行われた。今はもう、太陽が中天に昇っている。結果が発表される日暮れまでの時間を潰すのも兼ねて、私はその日、久しぶりに市へ食事へ出掛けた。

「やありユーン。今日はいい魚が入ってるよ」

「わあ、本当ですねえ。けれど今日は姉さんが食事の支度をしてくれるんですよ。なので、また今度」

「そうかい。じゃあ明日はよろしくな！」

「はいー」

馴染みの店主と挨拶を交わし、近場の屋台に席をとった。ここも両親が存命の頃から通う店だ。

「よおリユーン。今日は試験なんだって？ 調子はどうだ？」

「自信ありですよー。どうです、前祝いなんか」

「あつはつは！ よつし、いいぜ、今日は奢ってやる。その代わり落ちたら倍返しだからな」

「ええ、大丈夫ですよ！」

この市場の店主たちは、幼いころから自分たち姉弟を可愛がってくれる人ばかりだ。ただ最近では郊外に巨大なカジノがいくつも建設され、そちらに客足が向かうようになってしまった。

それでもこの明るい人々が大好きで、私はなにかあれば、必ずこちらの市場にやってきていた。

「ティティスのほうはどうなんだい、最近では試験の話は聞かないがまだ一位じゃないだろ？」

「はいー。姉さんの試験は、来年の夏に行われますよー。受かったら三位ですよ」

「そりゃあ凄いな！ その時はまた来いよ、ティティスも祝ってやらにゃあ」

「ありがとうございますー」

大好きな町。大好きな人々。この町と人々の支えになれるのなら、多少の苦勞など厭わない。

(まあ、町の外に興味がないと言えば嘘になりますが……)

姉と町と、自分の夢とを天秤にかけて、それがどちらに傾いているのか。その事実から必死に目をそらし続ける。姉と町の支えになりたいという気持ちに、嘘はなかったから。

やがて日暮れを迎え、高揚した気分を抑えられないままで結果を聞きに組合へ戻った。もちろん合格の判定を受け、早々に家路につ

く。

(ああ、早くしないと日が完璧に沈んでしまう)

姉の待つ我が家はもうすぐだ。そう思って地平線の向こうに沈む  
紅い夕陽へ視線を向けた時だった。

「!?!?」

異界の精霊族と出会った時のような、しかしそんなものとは比較  
にならない、おぞましい恐怖が身を襲った。

何があったのか考える間もなく、ただ家に急ぐ。

「姉さん!! 無事ですか?!」

失うのではないか。自分はその日のように、何も出来ぬ無力な存  
在のまま。

「リユーン。私は大丈夫よ」

幸い心配は無用だったようで、姉は無事だった。自分と同じよう  
に、あの身も心も凍りつく恐怖を感じはしづらいが、傷一つ負っ  
ていなかった。

「姉さん、今のは一体……」

「分からないわ。ただ、あんな強い波動はもしかして……」

そのティティスの言葉を遮り、町中に壮絶な悲鳴がこだました。

「!?!?」

「リユーン、町の様子がおかしいわ。行きましょう！」  
「は、はい！」

目が見えぬことが嘘のように、姉は駆け足で悲鳴のしたほうへ向かう。私たちはそこで見たものに目を疑った。

「なん、で、魔物が町に……！？」

複数の魔物が町の広場を占拠していた。その口腔は紅く染まり、足もとにはおぞましい肉塊がある。鉄錆の匂いが、だいぶ離れたこの場所まで漂ってくる。

人を、喰らったのだ。

「天を往く風よ、善きものをもたらす風よ。今ここにその力を示し、我にその力を貸し与えたまえ！」

ゴオツ、と強烈な風が吹き抜ける。ティティスが召喚した風の精霊が、風の力で魔物をその場に縛り付けたのだ。

「姉さん、これは……！！」

「迷っている暇などないわ！ 早急に組合に行き、他の精霊使いをここに呼んできて！ ここは私が押さえるから！」

「そんな」

「いいから早くしなさい！！」

「っは、はい！」

久しぶりの姉の怒声に、思わず怯んでしまった。私は姉の身を心配しつつも、確かに言う通りにすべきだと思い、組合に走った。

(光の精霊と契約を結べていれば……！！！)

風と水の精霊はすでに契約している。あとは光の精霊さえいれば、術で相手に意思を伝えることができるのに。

「組合長！」

「おお、スイーバルか！」

「町の広場に複数の魔物が押し寄せています！ 早く救援を！ 姉さんが一人で抑え込んでいるんです！！」  
「分かった、すぐに……」

組合長の言葉も半ばに、私は姉のところへ全速力で引き返した。姉は稀に見る霊力の持ち主とはいえ、もともとの体力がない。あれだけの魔物が本気で暴れば、すぐに力尽きてしまうはずだ。

失つてなるものか。このために力を求めたのに。無力が、嫌だから、頑張ったのに！

「凍てつけ、真なる水よ！ 高き空を往く風によりその力を変え、我にその力を貸し与えたまえ！」

私は走りながら、ありつただけの霊力を込めて呪文を詠唱した。すると空から巨大な霰が降り注いだ。それはまるで矢のような鋭さを得て、魔物の表皮に深く突き刺さった。最も親しい風と水の精霊の力を同時に借り、水を一瞬で凍らせたのだ。

「姉さん！」

「リユーン」

さすがのテイティスでも魔物を抑え込むのが精一杯だったらしく、先ほどの術以外、なにか施した形跡は見られなかった。

「すぐに組合の皆が来ます。もう大丈夫です！」

「ええ。私もだいぶ慣れてきたわ。このまま場を保つくらいなら大丈夫。だけど、リユーンも力を貸して頂戴？」

「はいっ」

姉と同じように、風で相手を縛する術を行使する。魔物はわずかに抵抗を見せたが、先ほどの氷の粒手にだいぶ体力を削られたらしい。すぐに大人しくなった。

(だけど、なんで魔物が町に……)

このクルツアータは精霊王の加護を受けし町。結界が張ってあるわけではないが、その高い霊力を嫌い、魔物や妖獣など、人に害を与えるものは近づかない。

それが、何故。

(まさか、先ほどのアレで魔物が興奮して我を失った……?)

それならば、なんて悲しいことだろう。人を襲った魔物は、絶対に処分しなくてはならない。よく見ればここにいる魔物たちは、普段は人を襲わない種族ばかりだ。

先ほどは無我夢中で術を放ったとはいえ、この魔物たちの行く末を思うと辛くなった。あの恐怖そのもののような波動さえなければ、この魔物も、魔物に襲われた人々も、健やかに暮らしていただろうに。

「リユーン、皆が来たわよ」

「っあ」

殺さないで。そう、叫びたくなった。

しかし、この魔物は人を喰らった。人の味を覚えてしまった。そのため、逃がせば再び人を襲う危険性がある。

あの恐怖を発したヒトを恨めばいいのだろうか。 いや、それも違う。あれは恐怖だったけど、それ以上の苦しみだった。悲しみだった。そして、絶望だった。

泣かないで。そうとしか、願えないくらいに。

やがて月明かりの下で断末魔の悲鳴をあげ、次々にくず折れていく魔物たちを、私はどこか遠い眼差しで見つめていた。

「リユーン、お願いがあるの。ゼフさんにこれを持って行ってくれないかしら」

「はい、分かりました」

それから、十年。あの事件で『使える』と目をつけられたのか、私は組み束縛されていた。あれだけ愛していた存在も、今はその思いが根底から揺らぎ始めている。

「今の時間はカジノにいらっしやいますかねえ」

「そうね。夜も遅いから、気をつけてね」

そうして出会う。揺らぐ思いも迷いも全て吹き飛ばし、自分で立ち向かうことを教えてくれた人々に。

大切なものを守る、その術を与えてくれた愛しい人々。

その人々と出会う前。あの出来事後のことだ。姉はとある考えを示していた。

「あれだけ強力な波動……。もしかして、界王様の血族ではないか

しら。血族は界王力を持つわ。あれだけ強力なのに、特殊力ではないのだから……」

その考えに私は同意した。それ以外、あの絶望の感覚に説明がつけられなかったからだ。やがてその真実は旅の途中、思いもよらぬ形で知ることになる。

ただ、その時の気ともう一つ似たような気　二つの血族の力を感じ取った姉が、私をその一行に加えようと画策したとは、三月の修行の間に初めて知らされた事実であった。

散華へきへき：ラルフ（前書き）

この話には残酷な描写が含まれます。ご注意ください。

## 散華へき：ラルフ

長い時間、船に揺られていた。何度も沈んでは昇る太陽と月を見た。

それが最初の記憶。

一人の少年が建物　今にも崩れそうな掘つ立て小屋　の陰に座り込んでいた。

ここは新大陸アイル。しかし、それ以外の地名は存在しない貧民窟だ。

作物には実りを、人々には憩いをもたらさず、穏やかな陽光。それはこの貧民窟にも分け隔てなく降り注いでいるが、少年は痩せこけた小さな身体をさらに小さくして、その光を避けるように座り込んだままだ。

少年の体の色素は異常なまでに薄く、まだ幼いというのに、すでにその毛髪は色を失い、降り積もった雪のような色をしていた。ふわりと吹いた熱を帯びた風に、少年がゆっくりと顔を上げる。死人のような顔をしながらも、瞳は強い力を秘めていた。ギョロリと動いた瞳の色は、血の色を映した紅。幼さゆえの美しさと妖しさを、少年は持ち合わせていた。隣に死を携えて。

少年が暮らす大陸の名は、アイル。その名の意味は希望。しかし現実には残酷なもので、この少年のように貧民窟に暮らす人々は数多い。そんな彼らにとって希望などという言葉は、嘲笑りの対象だ。希望など有りはしない。絶望の淵を這いずりまわって生きぬくのだから。

この貧民窟では、どこも生ごみが腐ったような、嫌な臭いが充満

していた。だが雨で汚水が溢れ出ないだけ、今日はマシだ。

少年　名をラルフという　は日中の活動を得意としなかった。生来の体質であるらしく、なぜか日光に当たるとすぐ弱ってしまう。だがその分、人並み以上に夜目が利いた。

長い時間、ほとんど動かないで過ごしたラルフは、日が傾き始めた頃、瘦身の身体を壁に預けるようにしながら、ゆっくりと立ち上がった。

ラルフがこの貧民窟に来たのは、半年ほど前だ。物心つく前に捨てられたラルフは、何度も死にかけ、その度に這い上がってきた。生を本能のまま渴望し、生きるために犯罪を繰り返した。

初めて人を殺めたのは、三年前だ。理由はわからない。けれど、いつの間にか死んでいた。目の前で、首から真っ赤な血を流して。その時、以前いた組織に拾われた。そこで徹底的に、暗殺術や武器の使い方などを仕込まれた。だが、その組織も今は存在しない。内部分裂を起こし、一夜で崩壊したのだ。

血のように赤い瞳、色素を失った真っ白な髪、病的に青白い肌。そんな容姿の子供は誰もが気味悪がり、利用しようという考えの奴以外、近寄ろうともしない。その上、ラルフは生まれつき妖力が強かった。組織の妖術者くずれ曰く、ラルフは他の三つの特殊力は微弱だが、妖力だけ突出して強く、一般の十倍以上あるという。

だが、妖力はどの土地でも忌むべき力だ。妖力を用いる者、強く持つ者は、例外なく拒まれる。

だからラルフは今夜、この貧民窟から去るつもりでいた。

この貧民窟を支配しているのはその頑強な肉体に反して　いや、比例してと言うべきか。随分とお粗末な頭脳しか持たない青年だ。

どこかに盗みに入る時など、作戦を立てるのはいつも他の人間だ。たまに取り巻き達にいいように扱われているのだが、青年は一生気がつかないだろう。

その青年たちから色々な面で、ラルフは目をつけられていた。いつまでも残っていれば、面倒に巻き込まれてしまう。

ラルフは建物の陰を縫うように道、いや隙間を進み、ラスの町に繋がる森に出た。

貧民窟とラスは森を介して繋がっており、ラスのおこぼれを頂戴する形で貧民窟は成立している。

この森はラスまで行くのに近道だが、魔物が住んでいる。だから人は立ち入らない、ラルフにぴったりの道なのだ。強い妖力は修行などせずとも、森の魔物など敵ではなかった。

それにラスの住人は何かあっても、わざわざ回り道をしてまで貧民窟に来ない。例え来たところで、無駄だと理解しているのだ。貧民窟は森以上に不可解な造りで、そこに暮らす者でさえ進路を誤るのだから。

やがてラルフは森を進み、ラスの西側にやってきた。

「おい、生きてるか爺さん」

ラルフは己の容姿が目立たないよう、用心して、ぼろぼろの布きれを被りながら一軒の扉を叩いた。町の隅に建つ、古ぼけて薄汚れた家だ。

「大した挨拶だな。さっさと入れ」

「邪魔するぞ」

「全くだ」

中に居たのは、一人の老人だった。老人の残り少ない歯は、煙草や酒でヤニが溜まり、黄色くなっている。爪も同様だ。家中の壁もまた無惨な様子を呈している。

「ひひっ、どうした、まだ日は落ちてないぞ。珍しいじゃないか」

嫌な笑い方だった。ラルフを客として扱ってはいるが、その目は

確実に蔑んでいる。

だがラルフもそれは百も承知だ。そもそも生まれてこの方、『まとも』な目で見られたことなど無い。

「仕事をくれ」

「ほう？ この前紹介したばかりだろう」

「雑魚を掴ませたくせに。俺はもうここを出る。金がいるんだ」

「ひひっ。そうかい、そいつは残念だ。お前さんは役に立ったんだが」

「仕事はあるのか」

「年寄りを急かすな。どれ……」

老人は奥の部屋に入り、何かを探してきた。一つの封書だ。

「お前さん、文字は読めたか？」

「大体は読める」

もう四ヶ月の付き合いだというのに、互いの名前すら知らない。相手は何をする奴なのか。知っているのは、それだけだった。

「何だ、この町か」

「そつだ。楽でいいだろう？」

「相手が相手だ。領主じゃないか。……期限は？」

「一昨日、『十日で』と受けた」

「なら、残りは七日か」

「そつだな。ひひっ、書いてある通り、報酬は高いぞ。どうする？」

ラルフは老人を睨み付けた。

どうする、と言おうが、指令を見た以上、拒むことは許されない。ラルフに残された選択肢とは、どんな方法をとるか。それだけだ。

「……明日から始める」  
「そうかい。それじゃあな」

老人はラルフの返事を聞くと、さっさと出ていけとばかりに、前金である金を投げつけて寄越し、せわしなく追い立てた。

ラルフも慣れたもので、その態度の変化に目くじらを立てるでもない。早々にこの家を去り、貧民窟を目指した。月だけが照らす帰り道、明日の計画を練りながら。

翌日。ラルフは目立つその容姿を、比較的まともな布を被って隠しながら、夜明け前の町を歩いていた。

このラスの領主は有能ではあるが、それだけ敵が多い。しかも好事家なため、色々な問題も抱えている。狙いはそこだ。

「おい、その君」

領主の館を目前にした時、一人の男がラルフに声をかけてきた。  
かかった。

「……はい、何ですか？」

ラルフはわざとしおらしい声で、怯え気味に答えた。男はそれに関心を示したのか、声を僅かに弾ませた。

「こんな早朝に何をしているんだい？ しかも布なんか被って」

猫なで声になった男はラルフが答えるのを待たずに、被っていた布をとろつとしてきた。

「や、止めて下さい！」

布に手がかけられる直前、ラルフは怖がる素振りを見せ、一步、後退りした。

男は好色な笑みを浮かべ、ラルフににじり寄った。

「ほう、何でだい？ 何を隠しているのかな」

「見ないで下さい。みんな、みんな不気味だって言うんです」

声を震わせ、俯いてラルフは言う。

「成る程。どれ、見せてご覧。私はどんな姿でも拒まないよ」

「……本当に？」

「ああ、本当だとも」

より喜色満面になった男は、ついにラルフの被っていた布をとり、その姿を見た。

「ほう、これはこれは……」

ラルフの珍しい容姿にも目を引かれたが、男が注目したのは別の部分だった。

「磨けば光る。坊や、私とおいで」

少年特有の中性的な美しさと、その容姿ゆえの妖美さに、男は惹かれていた。

男はラルフの手を引き、館の裏口に回ると、持っていた鍵で錠を開けた。ガシャリと重々しい音が響く。

「あ、あの。おじさんは……」

「まだ私の正体は秘密だ。なに、悪いようにはしない。着いておいで」

そう言った男は裏口の鍵を閉めないままで、館へと入っていった。ただの子供ならまだしも、幼くも裏の世界の住人であるラルフは、これで隠しているつもりか、と言いたくなる。

(使用人が勝手に子供を連れ込んだ上、鍵を閉めずにいるものか)

ラルフは男の後ろを付き従いつつ、こっそりと子供らしからぬ皮肉の笑みを浮かべた。

領主の性癖は貧民窟では有名だった。奥方も子供も、愛人すらいるくせに、夜な夜な町に出ては相手を買う。それも娼婦ではなく、少年を。

この町には少年が売春する店はない。お相手は貧民窟や路上の住人だ。彼らは生業としている奴も少なくない。領主としても安上がりで済む上に、後腐れのない相手だ。

その上で、気に入った少年を従僕だの何だのといって、囲うことも少なくなかった。

初めから政略婚で愛などない夫婦間、金さえ与えれば女からの文句はない。また、領主はこの道楽に溺れきることはなく、仕事はかなり有能だ。そのため、周囲も強く言えずにいるのだ。

「君、名前は？」

「……ありません」

「そうか。では私がつけてあげよう。ううむ、そうだな……」

こういった男が悦ぶ術を、ラルフは経験として知っていた。

まず、相手の征服欲をそそってやるのだ。怯える振りをして、一度は拒む。その後で受け入れてやればいい。しかも『自分だけ』と

という言葉を使わせて。

そうすれば、男たちは少年に『自分だけ』という言葉で刷り込めたと思い込む。自分自身に刷り込んでいるとも知らないで。

「よし、ではルビーにしよう。美しい紅の宝石だ。君にぴったりだ」  
「ルビー……。僕、ルビーなんですわね！　ありがとうございます」  
「うむ」

名付けは最良の手段だ。人は己の所有物に名前を付けるが、他人の物には付けられない。だから、名前を付けさせる。独占欲を煽つてやるために。

「ではルビー」

男が一つの扉を開けた。使用人のための、小じんまりとした質素な部屋だ。

「ここを君の部屋にしよう。そろそろ他の使用人が起きてくるから、誰かに聞いて、まず湯殿に行きなさい。身支度を整えるんだ」

「はい。……。あの、おじさんは何てお呼びすればいいですか？」

「それも聞いておくといい。楽しみにしているよ」

何を楽しみにしているんだ、この好き者め。

心中で毒づきながらも表情には出さず、ラルフは男を見送った。廊下の角を曲がったのを確認してから、備え付けのベットに腰を下した。

(まずは成功したな……)

薄明かりが差し込み始めている窓の外を見つめた。

言われた通り湯殿に入り、身綺麗にさせてもらおう。貧民窟ではお湯どころか、水さえ満足に手に入らないのだ。食事も遠慮なくいただくでしょう。

そうこう考えているうちに、人の気配がしてきた。使用人が起き出したのだろう。ラルフは歪んだ笑みを浮かべて、部屋の扉を静かに開けた。

廊下で出会った年かさの女中は、ラルフの容姿に驚くと同時に、またか、と言った顔をした。詳細を説明せずとも、慣れたものなのだろう、手早く湯殿や食事の用意を済ませた。

名をハンナと言い、ラルフを気味悪がってはいるが、仕事は仕事、そう割り切る人物らしい。

「あなたを連れてきたのは領主のジョセフ様よ。旦那様とお呼びしなさい」

「はい、ハンナさん」

使用人の食事とはいえ、貧民窟のように腐りかけの肉や野菜を食むわけではない。ラルフは遠慮なく、胃に入るだけ食事を詰め込んだ。

「あなた……。ここでのお仕事、わかっているの？」

ラルフの服を用意していたハンナが、ふいに言葉を濁した。いくら気味が悪いとは言え、ラルフも幼い子供だ。流石に哀れんだのだろう。

しかし、ラルフはこの言葉で一気にハンナを蔑んだ。

(問い返されたら返答も出来ないだろうに)

言葉だけの仮初めの心配など、吐き気がする。感情を挟まず仕事

に徹する、好ましい人間かと思ったのに。

「さあ……。だけど、どんなお仕事でも精一杯頑張ります！」  
「……。そう、ね」

無邪気な笑みを浮かべてやれば、ハンナは言葉を失った。

見て見ぬ振りをする、薄汚い大人ども。所詮、この老いぼれ女もその一人だ。

胸に渦巻くどす黒いモノを抑えながら、ラルフはコドモの仮面を被り続けた。

## 散華〈貳〉

身支度を整え終わると、ハンナに連れられ、ジョセフのもとへ向かう。道中、ハンナは思い出したように言った。

「明日からお客様がいらっしやるわ。南方のスードという町の領主様よ」

「……！」

「明日からは忙しくなるわねえ」

疲労を滲ませた溜め息を漏らすハンナをよそに、ラルフの頭は新たな情報を得て、改めて計画を練り始めていた。

自分を迷わず拾う物好きのことだ、ジョセフは新入りをすぐに『試す』だろう。客人がいようとそれは同じこと。自分に興味を持たせておけば、すぐに片が付く。

それに客人の出現は有り難い。罪を被ってくれる贄のご登場だ。わずかに高揚した気分のまま、ラルフはジョセフの部屋の前に立った。ハンナが扉を開ける。

「旦那様、失礼致します」

（どうせこの地は去る）

感慨など、塵一つほども有りはしない。

残された期限は六日。少し手荒くなるうが、必ず客人が滞在する間に始末をつけてみせる。

「おお！ ルビー、見違えたぞ！」

二人が部屋に入るなり、ジョセフは歓喜の声をあげた。  
ラルフは身体の汚れを落とし、服は見栄えのするものに替えた。  
食事もたらふく食べ、血色はそれなりに回復している。見違えたとい  
うのは、あながちに嘘ではなかった。

「ありがとうございます。……旦那様」

「うむ、うむ。明日は大事なお客様がいらっしやるんだよ、ルビー。  
しばらくハンナのもとで仕事を習いなさい。いいね？」

「はい」

「よし、いい子だ。ハンナ、ルビーを頼むぞ」

「かしこまりました」

好色な笑みを隠そうともしないジョセフに、お辞儀をするハンナ  
の顔には諦めの色が浮かんでいた。

その後、ラルフはハンナに連れられ、厨房へとやってきた。簡単  
な説明の後、皿洗いなど単純な仕事を与えられる。

ここなら館内の情報も逐一、女中の噂話として手に入る。ラルフ  
には好都合な職場だ。

かましい女中たちも初めのうちはラルフに怯えて口を閉じてい  
たが、ラルフが真面目に仕事をやれば、害はないと分かって一安心  
したのでろう。次第にいつも通り、やかましく働き始めた。

やがて一日を何事もなく終えると、ラルフは得た情報を整理する  
ため、部屋に戻った。

客人は僧侶だが領主でもあり、近くの教会に来たのをジョセフが  
招いたという。これを機にお近づきに、というやつだ。

僧侶ならば大抵は偽善者、そうでなければ愚かなお人好し。領主  
も務め上げるとすれば、強かな前者か。どちらにしる、好都合だ。  
疑り深い魔法使いより、格段に御し易い。

翌日、昼前になると、使用人は目まぐるしく動き始めた。そろそ  
ろ客人が到着するらしい。

色々と問題があるとは言え、ラルフも使用人の一人だ。雑用ばかりだが、さっそく大量の仕事を言い付けられた。

ラルフは元来、働くことが嫌いではない。それに、ここの使用人頭は人の扱いが巧かった。一瞬でその人がの能力を見抜き、相応の仕事を言い付けた。

しかも『仕事が出来るか否か』で人を判断する、ラルフにとって最も好ましい人種だった。

「おい、次はこれだ」

「はい」

次々に言い付けられる仕事をこなしていると、門が開く音がした。客人が到着したのだ。

「お客様が到着されたようだな。その仕事は他に回して、お前は厨房を出るな」

「わかりました」

ああ、本当に有能だ。

(使える奴だと気づいても、客人の機嫌を損ねる俺を外に出さない)

先ほどまでの好意が、一瞬で何か冷たいものになっていった。

生まれたときから、いつものことなのに。

結局ラルフはこの日、就寝時まで厨房を出ることは無かった。

深夜、ラルフは日付が変わって少し経ってから、ベッドを抜け出した。

(……明後日の夕方)

客人は帰り、館は日常に戻る。

依頼は絶対だ。こなさなければ、その瞬間から自分が狙われる。ラルフは足音を忍ばせて部屋から出た。音もなく外に出ると、ひとまず散歩の振りをして、庭を歩き回る。

領主の寝室はすでに確認済みだが、周囲の確認も必要だ。草木も眠る丑三つ時。今はヒトならぬモノの時。それは。

(狩りの時間だ)

恨みはない。ただ、恩もない。だから殺すけれど、一瞬で。余計な苦しみは与えない。

一歩一歩、獣のように目的地へと近づいていく。まだ下調べの段階だというのに、どうしても血が騒ぐ。瞳が爛々と輝く。

俺は殺戮に興奮している。

ラルフの顔に、歪んだ笑みが浮かんだ。

(あそこだ)

近くの木に登り、窓の中を伺った、その時。

「おや、君も眠れないのかな？」

「!?!」

さく、と草を踏む音がした。

「この館の方かな？ 申し訳ないが、散歩に出たら迷ってしまっ……」

ド、ド、と心臓が跳ね回る。落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせる。付近に人の気配は感じなかったのに、いつの間に。

(身なりからして、こいつがスードからの客人か。……俺の意図はバレてないな)

色々と仕込む前に客人とは関わりたくなかったが、この状況では仕方ない。ラルフは一息に木から飛び降りた。

「おお、若いなあ。元気でよろしいことだ」

「……ルビーと申します。お困りのようですので、私が部屋までご案内致します」

「それはありがたい。けどね、一ついいかい？」

「？」

還暦に届いたばかりだろう、老紳士然とした客人。髪も髭も、白と灰が入り混じった色合いをしている。

そんな男が、何とも優しい声で言った。

「君はまだ成長期なのだから、この時間は寝ていなければ。しっかりと睡眠をとらなければ、背が伸びなくなってしまうよ」

「……は？」

予想外 いや、有り得ないその言葉に、ラルフは客人を凝視してしまった。

何を言っているんだ、この男は。気配の消し方から、かなりの上手だと思ったのだが、単にただの馬鹿なのだろうか。

(俺を見て、他に言うことはないのか……?)

「こんな時間にも仕事があるのだろうか、なるべく寝た方がいい。まだ君は子供なのだから」

「……！ お客様、お戻りになられるのでしよう、お早くお願い致します！」

「え、あ、ああ、申し訳ない」

しまった。そう思ったけれど、もう遅い。

（客人に声を荒げるなんて。朝になればジョセフに告げ口されてしまう）

気に入らないもの、僅かでもその可能性があるものは、徹底的に排除される。

よく分かっていたはずなのに、あんなことを言ってしまった。無力な子供よ、と蔑まれることが、何より耐え難くて。

しかし客人は、そんなラルフの予想をことごとく覆っていた。

「すまない、ついお喋りが過ぎてしまったな。ルビー君、部屋に案内してもらえるかい」

「は……いい」

なんだ、何なんだ、この客人は。

頭が混乱して、上手く事態が飲み込めない。整理ができない。

何で自分に謝る？ 何で自分に何も言わない？

今までに体験したことのない扱いに、ラルフは混乱の極みに陥った。

怪しまれれば死あるのみ。本能とでも呼ぶべき危機意識で、何とか客人を部屋に案内したものの、ラルフはその間の記憶が判然としなかった。

「おお、ここだ。ありがとう、ルビー君」

「……いいえ」

こんな状態でよく部屋まで送り届けられたものだ、ラルフは自画自賛したくなった。

「ではね。お休み、ルビー君」

「……お休みなさいませ」

客人が部屋の戸を閉めるのを見届け、ラルフは安堵の息をもらした。

まったく、訳の分からない人物だった。

(……ああ、そうか。妖力の感知、出来ないんだな)

高位とはいえ僧侶、その職に妖力は必要ない。容姿に反応を示さないのは、単に興味がないだけなのだろう。

いや、もしかして他の大陸では、こうした姿の人々が暮らしていたりするのだろうか。巡礼先で見たことがあって、だから気にならないんだろうか。

(馬鹿な。そんなこと、あるはずがない)

そんな愚かな希望は、無惨に打ち砕かれるだけ。もう何度も願っては絶望してきたのだ。

(今さら、俺は何を……)

ラルフは唇を強く噛みしめると、下調べも忘れて自室へと駆け出し、勢いよく寝台へ伏せつた。

やがて朝日を浴びた館は、にわかにも覚めはじめる。使用人たち  
のざわめきで起床して、ラルフは初めて自分の失態を理解し、愕然

とした。

(俺は、いったい何を……？)

昨晩は大切な機会だった。現場の下調べは、自分の命を守るために必須。上手くやれば、客人に罪をなすり付ける手筈も整っただろう。それなのに。

自分の中で何かが狂い始めている。

嫌だ、こんなのは知らない。こんな苦しさは要らない。こんな胸の痛みは邪魔なだけだ！！

(あの客人のせいだ！！)

意味不明な言動をとるあの客人。そのせいで自分は混乱した。

(殺す、殺す殺す殺す殺してやる！)

金にならない殺しは面倒な事態を招くだけだから、普段は絶対にやらない。

しかし、これは別だ。あの客人を殺さなければ自分が狂う。そうならば、この先には死しかない。

(もう迷っている暇はない。二人とも殺してやる！！)

ぶわっ、とラルフの妖力が、一瞬でその強さを増した。辺りを殺意に満ち溢れた妖力が覆い尽くす。

そのため館にいる人々は、一様に胆を冷やした。もしや己の命は狩られるのではないか、と。理由なく怯えてしまうほど、ラルフの発した妖力は強大だった。

ただ、ラルフもこのまま妖力を発していれば自分の身に危険が及

ぶことは十分に理解していた。理性が戻るや否や、すぐに妖力を収める。

一度目を閉じ、ゆっくりと開ける。するとラルフはもう、完璧に平静さを取り戻していた。深呼吸を一つして、部屋を出た。

散華へ参 (前書き)

この話には残酷な描写が含まれます。ご注意ください。

## 散華へ参

仕事場である厨房に行くと、女達が一様に不安がった顔で、ひそひそと話をしていた。

「ねえ、私……。何か、凄い怖い感じがして、飛び起きたのよ」

「まあ、貴方も？ 私もよ。みんながそう言ってるわ。怖いわ、何があつたのかしら……」

自分が発した妖力を、みんな感じ取つたようだ。だが女達は特別に鍛えたわけではないから、原因である自分に目星をつけることは出来ないようだ。

やがて朝食の時間になると厨房は目まぐるしく動き始める。

毒でも扱えればこの立場を利用して、簡単に仕事を済ませられる。だが、生憎とラルフは毒に耐性はあっても、その知識はほとんどなかった。ラルフにとって植物は食えるか食えないか、どちらかではない。

そして昨日と同じように一日を厨房で過ごし、今日も夜を迎えた。今夜は客人最後の夜ということで、館では宴会が開かれる。館中が浮き足立つ、ラルフにとってまたとない機会だった。

へマさえしなければ二人とも殺せる。

夜も更け、ようやく館が寝静まった頃、ラルフは物音一つ立てずに部屋から滑り出た。

本当は客人を真つ先に殺したくてたまらなかった。しかしラルフはあくまでも冷静に、領主のもとへ向かう。

生き延びるために独学で身に付けた方法で気を断つと、慎重を期した昨晩とは違い、屋内を突き進む。見張りをいとも簡単にやり過ぎ、あつという間に領主の部屋の前にやってきた。

ジヨセフは『夜遊び』をするため、普段から部屋の入口に護衛を

置かない。仕事が格段にやりやすい相手だ。

ラルフは一つ手前の角に身を隠して辺りを確認すると、素早く室内へと侵入した。

(……いた)

目的。目標。獲物。

ジョセフは酒をかなり飲んだらしく、寝顔はかなり赤らんでいる。もし起きていれば寝台に誘って油断させ、事を成すつもりだったが、その必要性は消えた。このまま殺すだけでいい。

(ころす)

ラルフは室内に仕掛けがないかを確認し、一息にジョセフの枕元に駆け寄った。そして懐から一枚の布切れを取り出すとクルクルと細い筒状に巻き、右手に構える。

それに妖力を通せば、凶器の完成。

次の瞬間には、すぶ、と嫌な音とともに、鉄釘のように硬化した布切れが、ジョセフのこめかみに突き刺さっていた。

ジョセフはカツと目を見開いてこちらを凝視したものの、さしたる抵抗も出来ず、そのまま絶命した。

なんて呆気ない。これが、死。

(これで依頼は終了。追われる理由はない)

客人を殺しても、ジョセフを殺し損ねたら自分が狙われる。本来の標的を取り逃がしては意味がない。

ラルフは思わず笑みをこぼした。

(……!!)

しかし次の瞬間、ラルフは心臓が凍りつくかと思うほどの衝撃に襲われた。

『それ』から逃げるため、日々この血生臭い世界に身を浸しているというのに。

(こ、わい……!!)

助けて。誰か助けて。怯えたくない、感じたくない、知りたくない。

死の恐怖になんて触れたくない!!

(いやだ　!)

館がにわかに騒がしくなる。どんなに感知が苦手な者でも、今の恐怖の波動は、まさまざと感じ取ったはずだ。

あれは、命あるモノ全てが知る恐怖だった。生への、絶望だった。

(　　っ、このままでは……!)

しばらくは今の衝撃に気を取られているだろうが、すぐに誰かが主人の様子を見に来るはずだ。すでに絶命したジョセフの傍にはいられない。

子供であり、もともとからひ弱なラルフには、館の護衛全員を相手にできるほどの体力はない。急いで逃亡の手段を講じる。

(取り合えず、外に……!)

逃げよう。そう考えて一歩足を窓に向けて踏み出したが、咄嗟に体を反転させ、廊下に向かって駆け出した。

直感的にそう判断したが、確証はどこにも無かった。普段ならば考えられない行為だ。

だが、それは正解だったらしい。すぐに窓の外が騒がしくなった。屋外に配置されていた護衛が、不審者を警戒し、即座に敵戒態勢を取ったようだ。それが幸いして、ラルフは間一髪で自室に駆け込むことが出来た。警備が手薄な館内は、屋外と違い、みんな右往左往していたのである。

その時、耳を塞ぎたくなるような喚き声が聞こえてきた。ジョセフの部屋に使用人が立ち入ったのだらう。

「は、はははっ……」

もう遅い。ジョセフは死んだ。あの謎の波動のせいで動揺してしまい、仕込みが出来なかつたことは残念だが……。

そこで、ラルフはハツとした。

血の気がひく音が聞こえた気がした。大慌てで懐をまさぐるも、目的の物は見つからない。

（あの布が無い……！）

ジョセフを殺した布。傍目には凶器の血を拭ったように見えるだろうが、妖力に鋭敏な者が見れば一発だ。妖力の残滓で、力を込めたのは、殺したのは、自分だとバレてしまう。

（どうする。今はこの騒ぎ、様子を見に部屋を出てもおかしくはない……。だが、動揺で妖力を完璧には抑えられていない状態だ。それに気づかれる恐れも……）

これは、賭けだ。妖力に鋭敏な者は少ない。だが、そうした者は護衛に重宝される。この館の規模なら、いる可能性は十分にある。

ラルフは強く強く手を握りしめ　じつとりと汗ばんだ手を開いた。そして、ゆっくりと扉を開けたのだった。

（人の流れに乗って、ジョセフの部屋に行こう）

落ち着け。先ほどの波動は謎だらけだが、害はない。もう残滓すら感じないのだ。

そう思って廊下の角を曲がったとき、ドン、と誰かにぶつかってしまった。

「申し訳、……！」

なんで、ここに。なんでなんでなんでなんでなんで。

なんで、あの客人がここにいる　！

「おや、ルビー君か。大丈夫かい？　良かったら、また案内してくれないかな。この騒ぎでまた迷ってしまったね……」

自分を凝視しているラルフに何を思ったのか、客人は照れくさそうに言った。

「なん、で、ここに……」

「ん？　はは、私は極度の方向音痴だね。部屋に戻ろうとしたら……」

「……」  
「嘘を、つくな」

ピタリと、客人の動きが停止した。

ラルフの無礼な物言いに腹をたてるでもなく、じつとラルフを見つめている。

「嘘をつくな！　いくら方向音痴だろうが、使用人棟の奥まで来る奴などいるものか！」

こいつは分かっている。騒ぎの前にジヨセフの命が絶たれたこと、そして、その犯人が。

やはり、ただの馬鹿ではなかった。気術にも、特殊力の感知にも優れている。かなりの上手だ。

それがわかった途端、ラルフの身体を真つ黒な感情が支配した。思考も理性も吹っ飛んで、身体は殺戮衝動のままに動く。緋色の瞳が怒りに燃えた。

こいつを殺せ。殺せ。殺せコロセ殺せころせ殺せ！！

（死ね！！）

ズン、と布の刃が客人の左肩に突き刺さった。

咄嗟に服を破いた得物のため、いつもの獲物より使い辛いのは確かだ。それでも誰か一人を殺すくらい、わけない筈だった。

（狙い、が、ズレた……？）

喉を狙った。首に刺されれば少しズレても、致命傷は免れない。出血も多いから、相手は恐怖におののきながら死ぬ。

なのに、何故、肩に。

「……落ち着きましたか、ルビー君」

客人の言葉に、ラルフはびくりと肩を震わせた。その見開かれた瞳には、先ほどまでの力強い輝きはない。何を言われたのか理解出来ずにいた。

そんなラルフの様子を見つめながら、客人は妖力を失い、ただの布切れと化した凶器を肩から抜いて、回復術を行使し始めた。流石は高位の僧侶、みるみるうちに傷口が塞がっていく。

「人を殺めるのは大きな罪です。しかし　君は、そうした生き方しか知らないのですね」

「……………」

客人の言葉に、何故かラルフは後退った。

これまでの『日常』が、いとも簡単に壊れていく予感がして。

「君は妖力が非常に強い。これまで、数々の理不尽な扱いを受けてきたでしょう」

「……………? ……………?」

わけが分からなかった。確かに妖力は強い。だが、それがなんだったと言うんだ。

（理不尽な扱い？　だって、妖力を行使する者はそついう運命だろっ?）

分からなくて、何もかも分からなくなって、ラルフは怒りも憎しみも忘れ、ただ立ち尽くした。

「まさかこんなことになるとは……………。あの晩、すぐにも言うべきだった」

客人は頭を振って、硝子のように何の意味も宿していない、ラルフの瞳を見つめた。

「……どうだろう。私と一緒に、スードへ来ないかい？」  
「……。え？」

ラルフの思考は完全に停止した。  
理解という行為が、僅かも出来なかったのだ。

「私が治めるスードには、君のように理不尽な差別を受けた人々を保護しているんだ。今日の いや、これまでの罪は、そこで一生をかけて償うといい。……どうだい？」

今なら、騒ぎに乗じて君を逃がせる。そう客人は呟くように言った。

もしラルフの思考がいつも通りに働いていたら、この話に『裏がある』と考えて即座に断つただろう。

だが、何も考えられなかった。ただ本能のまま、魂の奥底から枯渴している『それ』を求めた。

「……………はい」

ぼたりと、何か熱いものがラルフの両目から零れ落ちた。それは止まることを知らずに流れ落ちる。

最早そこにいるのは、ただの子供だった。暗殺者でも殺人鬼でもない、愛情に飢えた、ただの子供。

客人の言葉は、ラルフが初めて触れた人の優しさだった。

「アーサー様」

「ああ、ラルフ。待っていたよ」

あれから十年。ラルフは客人　アーサーに連れられ、スードの

町に暮らしていた。そこでラルフの『日常』は少しずつ、だが確実に変わっていった。

アーサーはラルフ以外にも、似たような境遇に置かれていた人々を優しく迎え入れてきた。彼らはもう、死の恐怖に怯えることはない。

町の人々はラルフたちを歓迎しない。が、拒絶もしない。関わるものがあっても、常に無関心な隣人であった。それは仮初めでありながら、ラルフたちに生まれて初めての平穏をもたらした。

ラルフはアーサーに保護された中でも、際立って妖力が強い。そのため制御する術を学ぶ時、それまでが独学だったために、正式な修行で苦勞することも多かった。ただ、制御を学ぶと同時に、妖力を行使する際の効率も飛躍的に上がっていった。そして。

「また手伝っておくれ。とても困っているんだ」

「はい」

いつからか、アーサーの様子がおかしい。

それが分かっているながら、なぜかラルフはその事を深く考えられないでいた。

(この頃は、何か考えがうまくまとまらないような……)

「頼むよ、ラルフ」

アーサーの声に、ラルフの思考は中断された。まるで麻薬のように、それはラルフの脳を支配していく。

アーサー様が喜んで下さる、重要なのはそれだけだ。

ラルフはそうして己の思考を無理やり打ち切ると、霧がかかったような、だるさが残る頭を抱えながら、ゆっくりと屋敷を出て行っ

た。

何をすべきかを確認せず　けれど、何故かそれはすでに頭の中にある。

(砂漠地帯、の監視……)

町を吹き抜ける熱い風が、ラルフの頬を撫でた。

## 緋色に染めて

( やっぱり、リネアって凄いやな )

そんなことを思いながら、アルフォンスは箸を止めて向かいに座るリネアを見つめた。

大盛り上がりを見せたセルグの実家での宴と一転、今はとても爽やかで和やかな時間が流れていた。賑やかではあるが落ち着いた、そんな雰囲気の中でアルフォンスたちは朝食を食べていた。

昨夜の宴で聞いた、リネアの笛の音。アルフォンスは、あんな音は初めて耳にした。笛の音も、あの曲を聴いたのも初めてではないむしろ、あれはアスケイルで馴染み深い曲の一つだ。

だから陳腐な言葉を借りるとすれば、それはきつと。

( たましいを、ゆさぶられた )

そう言うのだろう。けれど、それも違う気がした。

村の孤児院の院長は、吟遊詩人の位を持っていて、よく楽器を演奏したり、歌ったりしてくれた。口癖は『音はその人を表すの』であり、院長の音は優しく、愛に満ち溢れていた。院の子供たちを、大きな愛で包み込む。その姿の通りに。

だからあれは、リネアを体現した音なのだ。涼やかに、澄み渡った夜の空気を切り裂いたあの音は。

ただの悲しみではない。苦しみでもない。リネアは変わったのだ。出逢った当初とは比べ物にならないくらいに。

もしもあの頃に笛を奏でたなら、あの音は出せなかっただろう。悲愴と絶望と悔恨、その音で聴衆の心を鷲掴みにしたはずだ。あまりに壮絶で、耳を塞ぐことが出来ないくらいに。

でも、あの音は鋭かったけれど、悲しみに満ち溢れた音ではなか

った。決して、苦しみもがく人が奏でる音ではなかった。

アルフォンスは、もう一度リネアを見た。

リネアは鏡だ。自分の鏡。もしかしたら、あそこにいるのは自分で、ここにリネアがいたかもしれない。

両親を知らない界王の血族。覚醒の儀を経ないまま成長し、力が暴走する可能性があった。支えてくれたのは、父が最も信用していた賢人。

自分には首飾りがあった。違いはただ、それだけだ。

アルフォンスはもう一度だけリネアを見て、再び箸を手を取った。

(セルグは……知っているんだろうか)

アルフォンスが自分を見ているなど露知らず、リネアはそつとセルグを見た。

昨夜のことは、ただ嬉しかった。

苦しくて、辛くて、泣きたくて、吐き出すことすら出来なかった痛みを受け止めてくれたから。

実を言うと初めて会った時、セルグは眼中になかった。アルフォンスにしか いや、あの剣にしか興味はなかったのだ。

しばらく行動を共にするにつれ、セルグはどうやら自分と良好な関係を築こうとしている、と理解するようになった。長い旅を共にするのだから、そうした態度も当然かと、深く考えることはなかった。アルフォンス相手と態度が違うのは少し気になったが、それは単に男女の差だろうとも。

自分からは関わらず、深入りしないで適当に相手をしていればいい。そう思っていたのに。

それがどうしたことだ。きっかけは、ローザンが旅に加わったことだろう。今思えば、それ以前からセルグは自分に積極的だった気がする。でも、あの時。ローザンがクルツァータで言い出した、あの賭け。あれが始まりだった。自分が、セルグを意識した切っ掛け

は。

何か違うものがある。アルとローザン、そのほかの人々とは違うものが、セルグに対して自分の中にある。そう理解できた時だったのだ。その答えを見つけたのは、セルグが初めて思いを明確に伝えてきたときだった。

(あれは、船の中だったな……)

苦しい苦しいと、ひどい船酔いにのたうちまわっていた船上だが、銀竜の登場あたりから、体が慣れたのか、セルグはだいぶ体調がよくなっていった。その晩、甲板で月を眺めていた自分に、セルグは言ったのだ。

好きだ、と。

あまりにも唐突で、でも真つ直ぐで。すとん、と胸の中に降りてきたその言葉は、自分の胸の中にある何かに答えをもたらしてくれた。ああ、同じなのだ。と。

そのまま想いを口にできたなら、どれだけ楽だっただろう。世界に拒まれる存在でさえなかったら。

何度も拒んだ。何度もはねのけた。それでもセルグは追いかけてきて、この手を掴まえてくれた。離さないでいてくれた。セルグは受け入れてくれたのだ。

いや、受け入れるも何も、セルグは自分を「リネア」としか見ていないのだ。自分に付属する様々な事象は、セルグにとって何の意味も持たない。

だから、そばにいる。ずっと、ずっと。ただの「リネア」でいられる、唯一の場所だから。

その奇跡に心から感謝していると、セルグは知っているのだろうか。

(今日からまた大変だな……)

昨晩は人生でもっとも喜ばしい時だったのは確かだが、これからが大変なのである。リネアが誰かに目移りすることはないだろうが、群がる虫どもは徹底的に排除するに限る。頭ではわかっていても、気に食わないものは気に食わないのだ。それに、目下の問題は。セルグはサツと視線をアルフォンスに移した。そうだ。目下の、いや、最大の問題はアルフォンスである。

アルフォンスとリネアに恋愛感情がないことは明白である。これまでの長い旅の間、アルフォンスはそうした反応を、驚くほど示さなかった。リネアはアルフォンスを『恋愛対象外』としているが、アルフォンスはまた別種の感情なのだろうとセルグはみている。

アルフォンスにとって、リネアは『もう一人の自分』なのだ。だから美しいとか頭がいいとか、第三者的な誰もが抱く感想は持つても、どこか遠い立場から見ている、それ以上近づこうとする意思はない。自分自身を恋愛の対象とはしないように。

しかし、それが厄介だった。リネアがもう一人の自分ならば、ささいな切っ掛け一つで、互いに手放すことのできない、絶対的な存在になるのではないだろうか。

アルフォンスはリネアに恋をしない。リネアもアルフォンスに恋をしない。それは自明の理で、絶対だけれど、お互いの『一番』は、『絶対』は、もしかすると……。

(ああもう、こんな暗い考えはやめだ、やめ！)

アルフォンスのことは、自分が誰よりも認めている。頑張り屋で、まっすぐで、優しく、だけどたまにドジな世界を救う勇者様。

けれど、渡せないものもある。だから、必死に守る。

(アル、お前の未来にリネアは深く関わらないほうがいいはずなんだ……)

二人が離れがたい存在になる。それはきつと、他に結びつく相手を失った時だろう。先ほど頭をよぎった『ささいな切っ掛け』など、それこそ有り得ないのだ。

邪推とか、嫉妬とか、そんなことは関係ない。考えれば誰にでもわかる。簡単なことだ。

だからこそ、リネアは離さない。絶対に、何があるうとも。

三人の思惑が交錯する中、朝の静けさが破られる時が近づいていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8977f/>

---

Piece of Legend ~ 伝説のカケラ ~

2011年10月11日03時05分発行